

宮 下 遺 跡

東海北陸自動車道建設に
伴う緊急発掘調査報告書

1991

日本道路公団
財團法人 岐阜県文化財保護センター

序

県下各地に所在する埋蔵文化財の保存と活用は、歴史と文化に基づく特色ある地方文化の形成に大きな役割を果たすものです。故に各種の開発事業に対してはその都度協議・調整を行い、多くの埋蔵文化財の保存に努めるのは周知の事実となっております。

東海北陸自動車道（美濃～八幡間）の建設についても計画段階から度重なる協議を続け、可能な限り埋蔵文化財の現状保存に務めていただきましたが、最終的に美並村内に所在する3遺跡については記録保存を図ることとし、財団法人岐阜県文化財保護センターでは平成3年度から発掘調査を開始しました。本書はその内の宮下遺跡の調査報告書であります。当遺跡では縄文時代後期から晩期にかけての遺跡が発見され、地域の歴史的変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。これらの成果をおさめた本書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、今後の研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで多大なご支援とご協力を賜りました日本道路公団美濃工事事務所、美並村役場、美並村教育委員会並びに地元関係者各位、そして発掘調査、整理作業に携わった方々に深く感謝申し上げます。

平成4年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 岩崎忠夫

例　　言

1. 本書は東海北陸自動車道（美濃～八幡間）建設に伴う平成3年度の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本書には、平成3年度調査を実施した3遺跡のうち『宮下遺跡』の調査結果を収録した。

2. 当調査事業は、岐阜県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施したものである。

なお、遺跡所在地・調査体制は下記の通りである。

遺　　跡　名 宮下遺跡（岐阜県遺跡地図G21MO1280）

所　　在　地 岐阜県郡上郡美並村山田字宮下

調　　査　期　間 平成3年5月23日～平成4年3月31日

現地調査平成3年5月23日～平成3年10月18日（延べ82日間）

理　事　長 秋本敏文（平成3年4月1日～平成3年10月15日）

岩崎忠夫（平成3年10月16日～平成4年3月31日）

副理事長 篠田幸雄

調　　査　指　導 岐阜県教育委員会

指導調査員 伊藤秋男（南山大学文学部人類学科教授）

調　　査　課　長 西村覚良

調　　査　係　長 只腰正知

調査担当者 佐野康雄・川部　誠

事　務　局 事務局長 岩砂　仁

総務係長 小林哲夫

3. 発掘調査・遺物整理・報告書作成にあたっては、上記の担当者のほか、下記のセンター職員が協力した。

宇野治幸・武藤貞昭・上嶋善治・各務光洋・鈴木　昇

4. 本書に掲載した周辺遺跡分布図は、建設省国土地理院発行50,000分の1の「美濃」「八幡」を複製した。

5. 発掘調査にあたっては日本道路公団美濃工事事務所、美並村教育委員会など関係機関の協力を得た。

6. 本書の作成は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章1・3、第Ⅳ章1・2・4、第Ⅴ章を佐野、第Ⅳ章3を藤田が分担した。又、第Ⅳ章2は岐阜大学教育学部教授梶田澄雄氏より玉稿を賜った。ここに記して感謝申し上げます。
7. 土器の実測・拓本・トレースは武藤・藤田・佐野が担当し、石器の実測・トレースは長屋・佐野が担当した。
8. 現地調査・報告書作成にあたっては下記の方々からご指導とご助言を賜った。末尾ながら銘記して感謝を表します。

伊藤秋男・大熊厚志・大參義一・梶田澄雄・田中彰・谷口和人・長屋幸二・林順一
藤田英博・古田靖志・吉田英敏・西井久晃（順不同）

9. 発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々の参加・協力を得た。（順不同）
藤井定彦・竹内登喜夫・矢島ゆり子・後藤彦司・水川五月・須田すみゑ・須田そとゑ・西部あさゑ・古田宮七郎・藤川さだ・長瀬定一・川島種・篠田玉子・高橋猛・藤田優・村瀬正夫・末松富士明・馬場義憲・山中寛一・日置正次・山田あさ子・河合二喜・美甘典夫・高瀬愛子・古川巖・佐田進・小平陽司・大塚昭二・粥川茂子・多田一雄・村井誠一・増田登・河合千代子・勝水泰二・勝水八重子・佐藤一夫・鈴木トミエ・篠原久司・山下豊三・高垣三松・和田房江・谷合一美・松井都・澤谷緑・田中治雄・直井宗吉・石田定雄・曾我巖・曾我三千代・大沢裕子・桜井美樹・村井美代・北原絵美
10. 本書に報告した遺跡の記録類、及び出土した遺物は岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　例

1. 遺構については検出順に一連番号を付している。なお、本文他で使用した記号は以下のとおりである。
S B - 壓穴住所址、SK - 土壌、P - ピット
2. 本書中で使用した土色名については「新版標準土色帳」（小山・竹原1970）を使用した。

3. 本報告書の執筆基準は以下のとおりである。

- (1) 遺構平面図、土層断面図、遺物分布図の縮尺については各々にスケールを付してた。
- (2) 土器の拓影・実測図は $\frac{1}{10}$ 、 $\frac{1}{4}$ を縮尺とし、石器・石製品の縮尺は $\frac{1}{5}$ 、 $\frac{1}{2}$ とし、各々にスケールを付した。
- (3) 図版中縄文土器は $\frac{1}{5}$ 、石器は $\frac{1}{2}$ の縮尺とした。
- (4) 土器、石器・石製品は挿図通し番号とし、図版に付した番号と対応する。又、本文中の記述にもこの通し番号を使用した。
- (5) 遺物平面図におけるドット点は青→石器、赤→土器を示す。

目 次

I. 調査に至る経過.....	1
II. 調査の経過.....	2
III. 遺跡の立地・環境と層序	
1. 自然的・歴史的環境.....	4
2. 地形・地質.....	4
3. 遺跡の層序.....	6
IV. 遺構と遺物	
1. 遺構と遺物の分布.....	9
2. 検出された遺構.....	12
3. 出土した土器.....	16
4. 出土した石器・石製品.....	29
V. 考察.....	50

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図.....	3
第2図 遺跡周辺地質図.....	5
第3図 基本柱状図.....	6
第4図 土層断面図.....	7
第5図 周辺地形図.....	8
第6図 グリッド配置図及び遺跡分布図.....	10
第7図 出土遺物平面・垂直分布図.....	11
第8図 S B 1 及び周辺遺物平面・垂直分布図.....	13
第9図 S B 2 及び周辺遺物平面・垂直分布図.....	14
第10図 縄文時代土壤及びピット.....	15
第11図 縄文土器（1）.....	18

第12図	縄文土器（2）	19
第13図	縄文土器（3）	20
第14図	縄文土器（4）	21
第15図	縄文土器（5）	22
第16図	縄文土器（6）	23
第17図	石器実測図（1）有舌尖頭器・石鎌・石錐	40
第18図	石器実測図（2）石錐・削器・ビエスエスキュー	41
第19図	石器実測図（3）ビエスエスキュー・彫器・ヘラ形石器・RF・UF	42
第20図	石器実測図（4）UF・石核	43
第21図	石器実測図（5）石核	44
第22図	石器実測図（6）石核	45
第23図	石器実測図（7）礫石錐・切り目石錐	46
第24図	石器実測図（8）切り目石錐	47
第25図	石器実測図（9）打製石斧・磨製石斧・石刀	48
第26図	石器実測図（10）凹石・石皿・磨石	49

付表目次

表-1	土器観察表（1）	24
表-2	土器観察表（2）	25
表-3	土器観察表（3）	26
表-4	土器観察表（4）	27
表-5	土器観察表（5）	28
表-6	有舌尖頭器属性表	29
表-7	石鎌属性表（1）	30
表-8	石鎌属性表（2）	31
表-9	石錐属性表	32
表-10	削器属性表	32
表-11	ビエスエスキュー計測表	33
表-12	彫器計測表	33
表-13	ヘラ形石器計測表	33
表-14	礫石錐計測表	35

表-15	切り目石錐計測表	36
表-16	打製石斧計測表（1）	36
表-17	打製石斧計測表（2）	37
表-18	打製石斧計測表（3）	38
表-19	打製石斧計測表（4）	39

図版目次

- 図 1 遺跡遠景・遺跡近景
 図 2 発掘後全景・調査風景
 図 3 SK 1 検出状況・SK 1 完掘状況
 図 4 SK 2 完掘状況・SK 3 完掘状況
 図 5 P 1 完掘状況・SB 1 炉
 図 6 SB 2・SB 2 炉
 図 7 有舌尖頭器（NO. 1）出土状況・石刀（NO. 90出土状況）
 図 8 繩文土器（1）・繩文土器（2）
 図 9 繩文土器（3）・繩文土器（4）
 図 10 繩文土器（6）・繩文土器（NO. 108）
 図 11 有舌尖頭器・石錐・石錐・削器・ビエスエスキュー・彫器・ヘラ形石器・RF・UF
 図 12 石核・石錐
 図 13 打製石斧・石刀・磨製石斧

I 調査に至る経過

宮下遺跡は昭和56年10月から12月にかけて岐阜県教育委員会が主体となって行った美濃～白鳥間の分布調査によって発見・登録された遺跡である。これは高速自動車国道東海北陸自動車道（美濃～白鳥間）建設計画に伴い、日本道路公団名古屋建設局白鳥調査事務所より依頼を受け実施したものである。この調査によって対象となった地区には10ヶ所の新発見遺跡を含む21ヶ所の遺跡があることが明らかになった。岐阜県教育委員会は21ヶ所の遺跡について、文化財保護委員会事務局と日本道路公団との間における「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、発掘調査の必要の有無を同年12月に回答している。

昭和59年7月東海北陸自動車道（美濃～八幡間）建設事業の施工に伴い、美濃市・美並村・八幡町に所在する埋蔵文化財包蔵地に対する取扱いについて日本道路公団名古屋建設局より協議を受けた岐阜県教育委員会では当該市町村との協議を含め正式ルート内には20ヶ所の遺跡が所在し、内8ヶ所の遺跡について発掘調査が必要である旨を文化庁と岐阜県教育委員会との「埋蔵文化財の取扱いに関する協議」を経て翌年1月に回答している。これらのうち最初に発掘調査が実施されたのは美濃市「桜の木遺跡」であり、昭和60年度7月～10月にかけてのことであった。本調査は美濃市教育委員会が主体となって実施され、中世に属する建物址2軒他が検出された。「桜の木遺跡」に続き、同市教育委員会により「上巾上II遺跡」の調査が昭和62年10月から11月にかけて行われた。これは前年度実施された県道美濃高富線拡幅工事に伴い実施された「上巾上遺跡」が、東海北陸自動車道建設予定地内へも広がりをもつことが判明したことにより急拠実施したものである。「上巾上II遺跡」からは堅穴住居址10軒、建物址（7世紀前半）1軒、溝状遺構（江戸前期）7条、土壙34基等が検出されている。

岐阜県教育委員会では、平成3年度より国・県事業に伴う埋蔵文化財発掘調査等については（財）岐阜県文化財保護センターを設立し対応することとし、東海北陸道建設に伴う平成3年度調査実施予定の深戸遺跡・宮下遺跡・野首遺跡・赤谷遺跡計6850m²について予算化を行った。平成3年4月1日付で岐阜県教員委員会と日本道路公団名古屋建設局が委託契約を結び、同日付（財）岐阜県文化財保護センターが再委託を受け調査を開始したが、深戸遺跡が当初の予定期面積5000m²まで遺跡の広がりがみられないこと、赤谷遺跡の試掘調査の結果、田畠造成等で大きな破壊を受け、遺物・遺構もほとんど残されていない状態であること、日本道路公団名古屋建設局側の工程変更に伴う東海北陸自動車道美並インターチェンジの建設工事早期化の協議を同年8月に受けたこと等を考慮し、美並インターチェンジ建設予定地内に所在する鶴尾山城を赤谷遺跡・深戸遺跡の一部に換えて実施することとした。また、野首遺跡に関しては高架設計となり遺跡の大部分が破壊を受けないことが判明し、工事に関しては立会することとした。

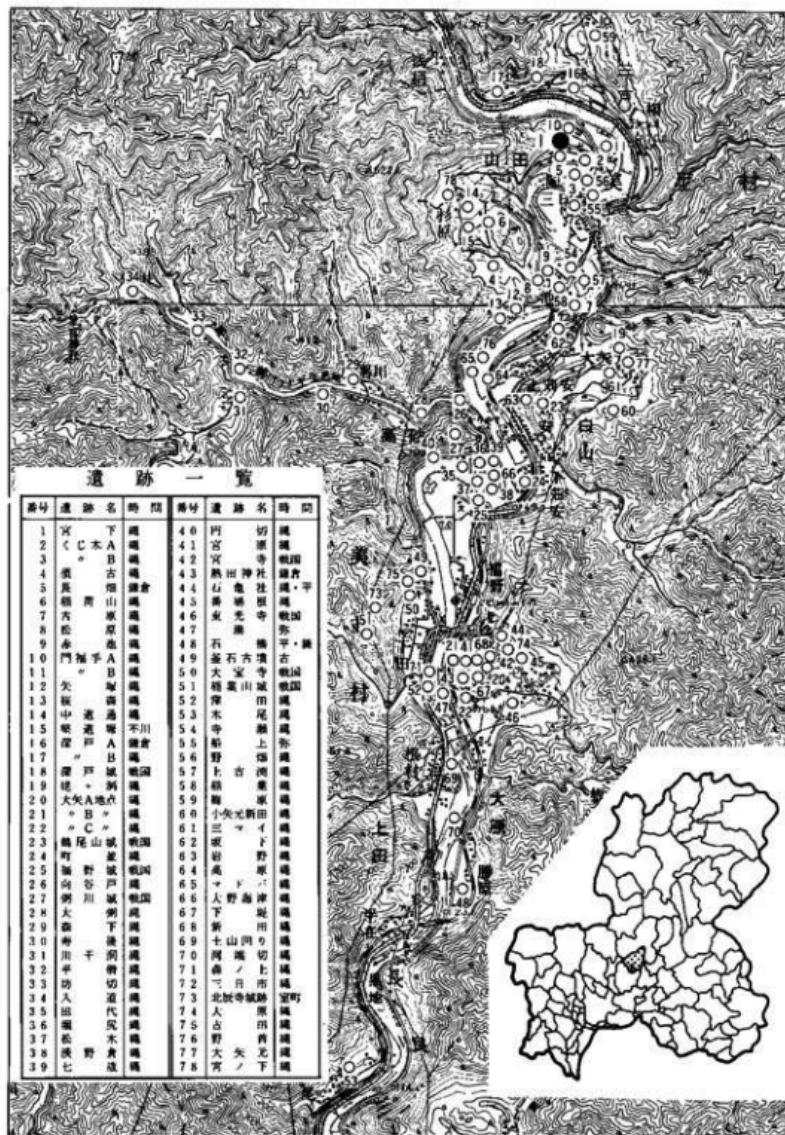
II 調査の経過

現地調査は平成3年5月23日から10月18日まで延べ82日間実施し、同年10月21～29日に若干の補足調査及び道具等のかたづけを行った。また出土遺物の水洗・注記は同年11月1日～翌年1月31日における雨天時及び他二遺跡調査終了後現場事務所にて実施した。さらに報告書の作成事業とそれに伴う遺物整理作業を、平成4年1月31日から同年3月31日まで岐阜県文化財保護センターで実施した。以下に現地調査の経過を段階ごとに略記する。なお、グリッドは磁北に主軸を合わせ、1辺を4mとし、東から西へ0～7、北から南へA～Kの呼称を付した。

第1段階（5月31日～6月12日）の調査は、調査対象面積600m²に対して遺跡の広がりを確認し、また土捨場を確保するために2m×2mのトレントを北部・中央部・西部3か所に設定し、掘り下げを行った。この内、西部のトレントでは約30～40cmで地山に達し遺物も皆無であったので、E・F・G-5区以西区の第1層の掘り下げから開始した。その結果E・F・G-5区以西ではトレントの結果と同様30～40cmで地山に達し遺物も少なく遺構も皆無であったので、4列以東の第1層掘削の開始と同時に隣接する借地と合わせて当該地を土捨場とした。

第2段階（6月13日～9月11日）の調査は4列以東における第II層の掘り下げの段階である。本調査では遺物及び遺構の取り上げに関して、光波トランシットとコンピューターによる記録取り上げを採用し、7月8日より同機器による取り上げを開始した。取り上げの基準となる機械点を南北に2ヶ所設定し、作業の進み具合に応じてどちらかでも取り上げを可能とした。1日約70～90点の縄文土器片等遺物の取り上げを行った。また、C-3区、G-1区第II層中より炉址を検出。その後慎重に掘り下げを実施したが床面等の確認はできなかった。B～C-2区でSK1を、G-2区でSK2を、G-1区でSK3、H-0区でP1を検出。いずれも確認面は第III層上面であった。I-1区で土壤を1基確認したが現代の擾乱堆であることが判明。9月5日美並村立吉田小学校5・6年生、同三城小学校6年生が現場にて発掘体験学習を実施、約80名が参加した。9月11日には梶田澄雄岐阜大学教育学部教授に地形・地質について指導を頂いた。東西南北に残したベルトの断面図完成。遺物の取り上げ点数は1673点を数える。

第3段階（9月12日～10月18日）の調査は、第2段階で検出したSB1及び2、SK1～3、P1の精査・記録に入る。また、東西南北に残したベルトの掘り下げも開始する。掘り下げ完了時点で縄文土器片、石器、石製品、剝片等の取り上げは総点数2005点にのぼった。SB1の炉に断ち割りを入れたところ、炉底面には土器片が散かれており、調査対象地域外へ続いていることが判明し、調査北部にはかなりの遺跡の広がりを想定させる1つの証拠になり得た。SB2とSK2・3の関係について検討を入れるために断ち割りを実施。旧地形の測量作業を行い、発掘完了後の空撮のため最後の清掃作業を行うが、雨にたたられ、再度清掃作業を行い10月18日に空撮を実施。合わせて現場小屋及び道具のかたづけを行い、現地調査を終了した。



第1図 周辺遺跡分布図 (S=1:50,000)

III 遺跡の立地・環境と層序

1、自然的・歴史的環境（第1図）

宮下遺跡は郡上郡美並村山田字宮下に所在し、長良川と約55～70mの比高をもつ山麓緩斜面上に位置する。美並村は長良川の上流に沿った南北に長い村で、周辺を600m前後の定高性の山々に囲まれ河岸段丘の発達は不全である。しかし、左岸においては比較的段丘が発達している箇所もみられ、遺跡もこの沿岸に多く集中している。

大部分の遺跡が表採による断片的資料しかない現状であるが、縄文時代早・前期に属する遺跡として、宮原・吉原・田代遺跡が掲げられる。後二遺跡については三つの石からなる立石があったという。中期に属する遺跡としては、窪田・松本・淡野倉・稻葉遺跡がある。稻葉遺跡は昭和62年県営は場整備事業に伴い発掘調査が行われ、中期後半から後期にかけての竪穴住居址12基、土壙18基等が検出されている。出土土器については関東系を中心にわずかに北陸・関西系が入っている様相が報告されている。後期の遺跡としては松本・石龜社・町並・窪田・淡野倉の遺跡があり、後二者からは多量の土器の出土が報告されている。晩期に属する遺跡は石龜社遺跡がある。当遺跡は昭和49年名古屋大学文学部考古学研究室によって発掘調査が行われ、ピット群等が検出された。多量の晩期に属する精製・粗製土器が出土しており、その土器群から北陸地方との関連が述べられている。なお、村内には出土地点不明の多くの御物石器・石剣・石棒等が出土しており飛驒との関連がうかがわれる。

弥生時代に属する確実な遺跡は確認されていないが、古墳時代後期に属する釜石古墳が唯一1基存在する。名古屋大学文学部考古学研究室によって昭和50年に調査が行われており、無袖式長方形プランをもち、「コ」の字形の土壙に石室が構築されていることや、特異な排水施設をもつことが報告されている。副葬品としては环身・小型蓋付短頸壺・刀子等があり、これらが3次にかけて埋葬されたことが想定されている。

古墳時代以降については、石橋遺跡が存在し、平安時代に属する住居跡が発見されたという記録がある。また、戦国時代になると多くの城・寺院が出現し始め、この地における活発な人間活動をみることができる。

2、地形・地質（第2・5図）

宮下遺跡は美並村山田の古期段丘面を覆う崖縫性堆積物よりなる山麓緩斜面上にある。遺跡の近くを流れる長良川は、この付近でいちじるしく曲流し、三段の河岸段丘を形成し、開けた平地を作っている。

この付近の地質・地形は脇田¹⁾によって報告されている。以下脇田の報告をもとに、空中写真的立体視による観察と野外実地調査によって得られた知見を加えて報告する。



第2圖 這路周邊地質圖

基盤岩類は中生代ジュラ紀中期に堆積した砂岩・泥質海底地すべり堆積物よりなり、これより古い時代の古生代から中生代三疊紀後期にわたる異地性岩体のチャート・緑色岩類・石灰岩が取り込まれ複雑な岩層分布をしている。第三紀層は見られない。

駒田は段丘堆積物を古期と新期に分け、最新期の段丘面を“現河床堆積物”としているが、明瞭な段丘地形を形成しているのでここでは最新段丘堆積物とした。

遺跡付近の古期段丘堆積物は美並村杉原・梅原に見られ、段丘面と現河床面との高度差は55~70mである。段丘面は強く開析され、さらに崖錐性堆積物の被覆を受けているため原形をとどめていない。杉原の古期段丘堆積物は主として礫層で、礫層の中に厚さ約3mの泥・シルト・砂が挟まる。礫はいずれも円礫で、径1~50cmで12~15cmのものが多く、大半は安山岩からなり、ついで流紋岩・石英斑岩で、チャート・砂岩・泥岩・花崗岩類からなるものがわずかにある。礫層の基質は黄褐色～赤褐色の中粒砂である。杉原のこの古期段丘の堆積物の淘汰の悪い角礫の含む崖錐性堆積物によって覆われており、宮下遺跡はこの中に埋没している。

梅原の古期段丘堆積物は厚い礫層と砂層からなる。砂層は厚さ12mにも達し、所々に径0.5~10cmのチャート角礫を特徴的に伴う。礫層は、礫種も礫径も杉原のものとよく似ている。

遺跡付近の新規段丘は赤池・三ヶ日・門福手付近に分布する。段丘面と現河床面との高度差は10~15mである。段丘面はかなりの開析を受けているが、緩やかな平坦面を残している。赤池の新規段丘はある程度の広がりはあるが、三ヶ日・門福手付近に分布するものは非常に小規模である。赤池の段丘堆積物は礫層と砂層よりなり、砂層は黄褐色の淘汰の悪い砂からなり、細礫から粗粒砂へと上方に向かって変化している。礫層は赤褐色の砂を基質とし、径1~65cmの円礫を含んでいる。厚さは1~2mである。流紋岩・石英斑岩の礫が多く、次いで安山岩類・砂岩の礫が多くチャートの礫もときどき含まれている。

最新期段丘は赤地・三ヶ日・門福手・相戸付近に分布し耕地・居住地となっている。段丘面と現河床面との高度差は数mである。

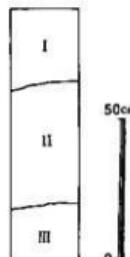
3、遺跡の層序（第3・4図）

本調査区内における基本的層序は以下のとおりである。

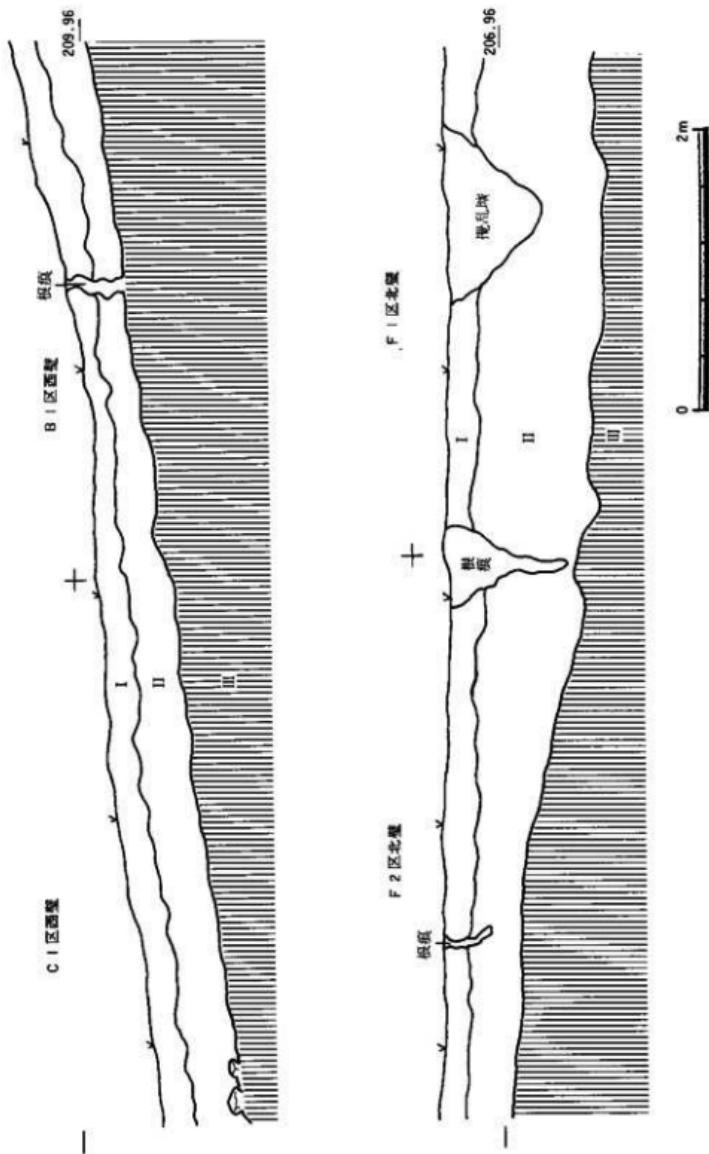
I層 7.5Y R3/4暗褐色砂質粘土：現表土及び耕作土である。草根の非常に多い部分。I列以南の下部斜面では厚く堆積し色調がやや褐色化する。

II層 7.5Y R3/2黒褐色砂質粘土：遺物包含層。粘性が強い。北西部から南部にかけて1~20mm程度のチャート礫を多く含み、下部山麓緩斜面向かうほど厚く堆積するが、J・K列では薄く不安定である。

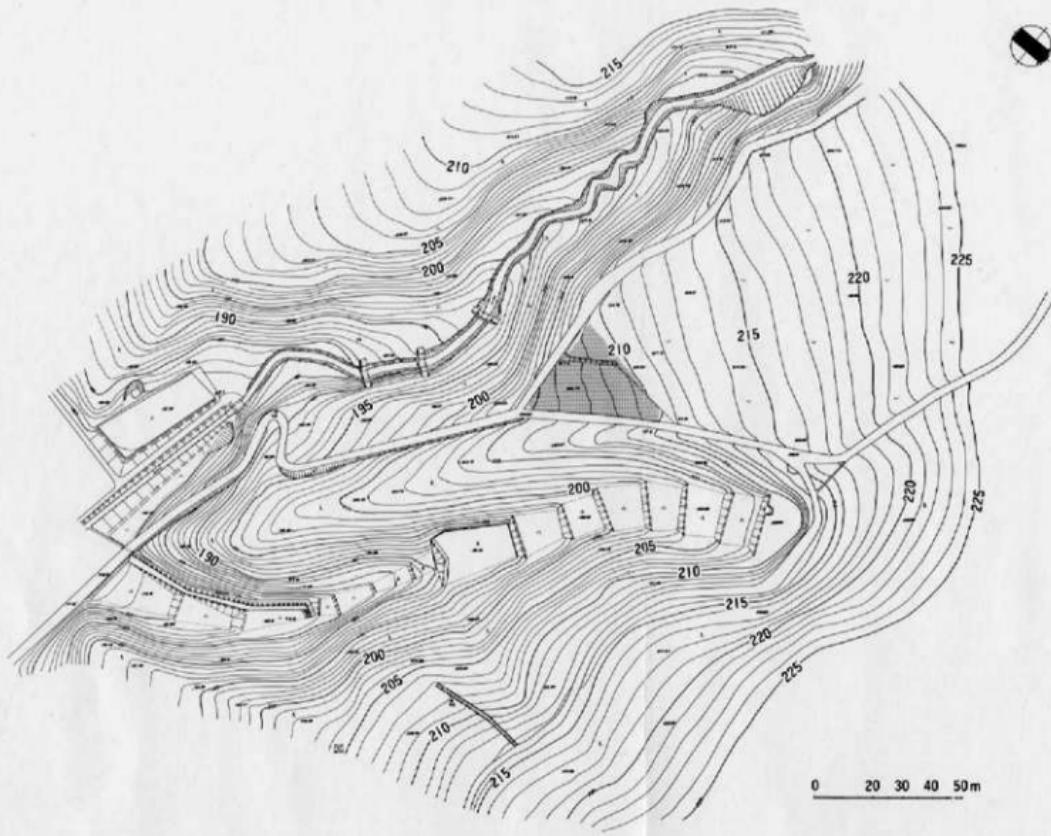
III層 10Y R7/6明黄褐色砂質粘土：円礫を多く含む。地山層。



第3図 基本柱状図



第4図 土層断面図



第5図 地形図

IV 遺構と遺物

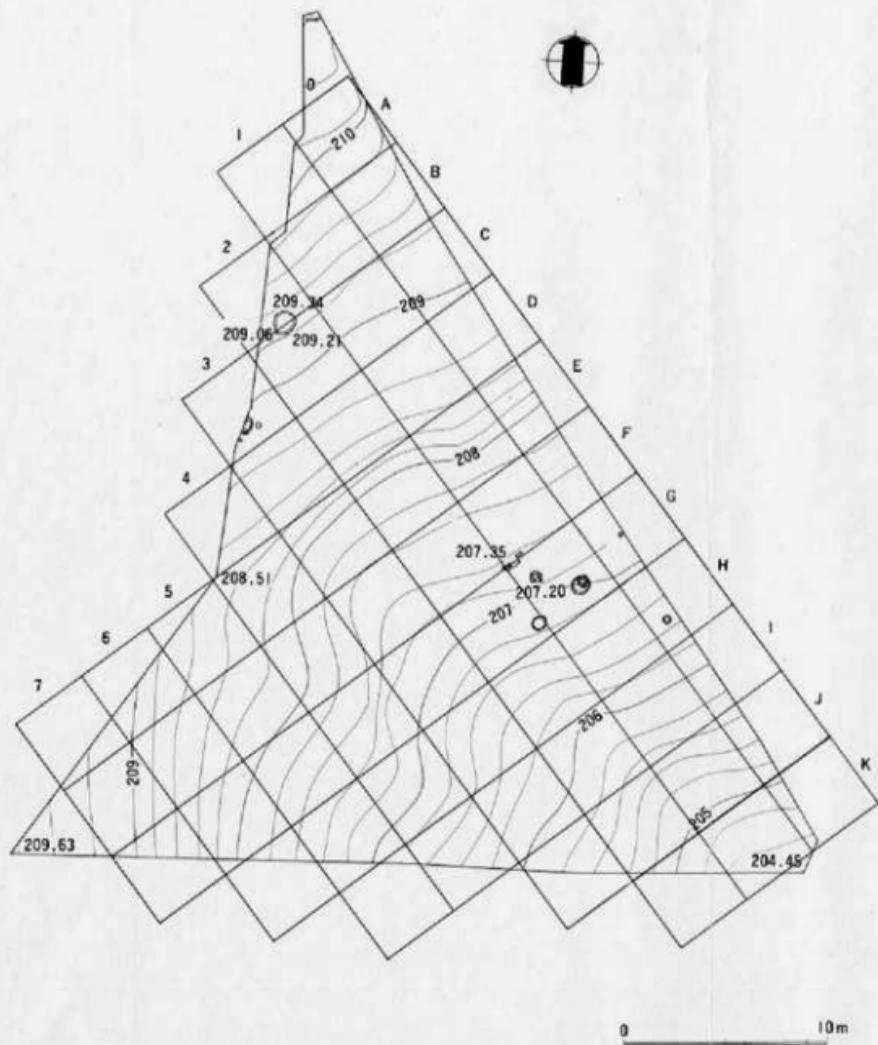
1、遺構と遺物の分布（第6・7図）

(1) 遺構について

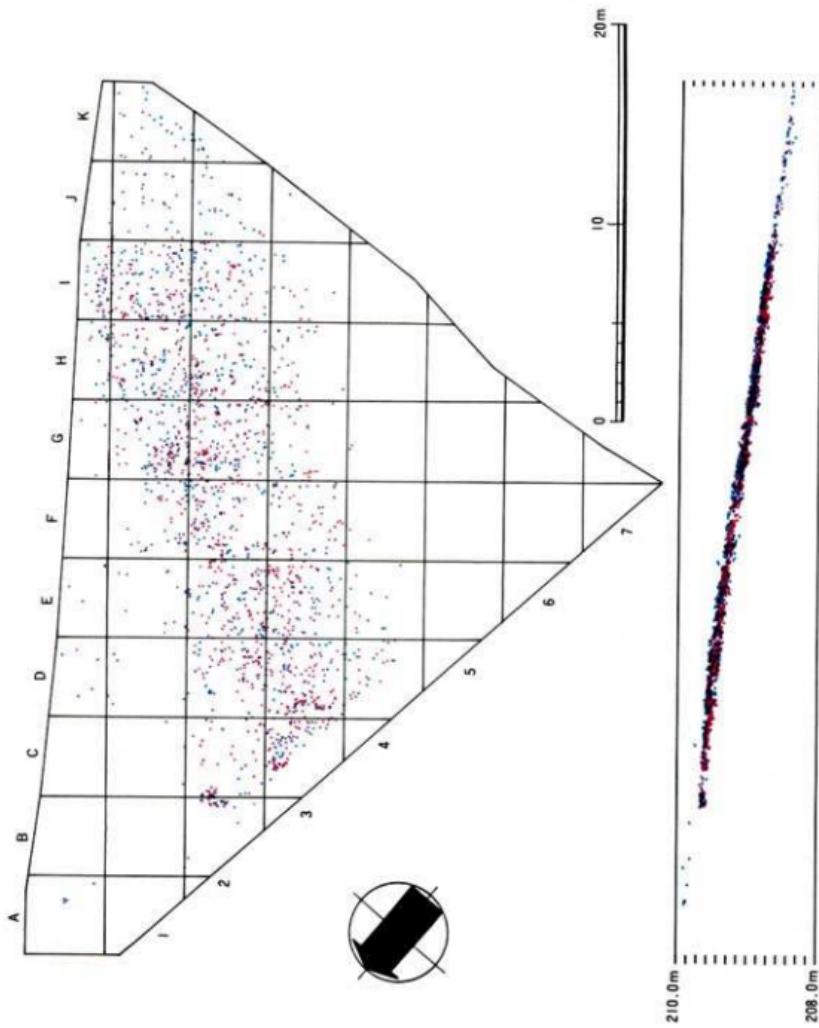
今回の調査において検出された遺構は、縄文時代後期・晩期に属すると考えられる堅穴住居址2基、土壙3基、性格不明のピット1基である。ただし堅穴住居址については、2基とも第II層中に炉址が検出され、その後慎重な検出を行ったが掘り込み面及び床面等について確認できなかった。第II層中における遺構面の検出は非常に困難であり、遺物の広がりから堅穴住居址の広がりの予想が可能ではと考えたが、後述するように遺物の分布も二次的堆積による流れ込みが多いことが判明したので、住居址の広がりを想起させる有効な根拠となり得なかった。また、炉址等の断ち割りの結果、炉を形成する河原石は第II層中に掘り込み建造した痕跡はみられたが、床面を貼ることはなかったようである。他の遺構確認面は第III層上面である。遺構どうしの関係・切り合いについては、SB2とSK3についてみられ、おそらくSK3がSB2を切っていると考えられる。また、SB2とSK2についてはSK2の掘り込み面はSB2の床面レベルと想定される高さにあるように考えられ、SB2に伴う土壙である可能性が高い。

(2) 遺物について

今回の調査で出土した遺物は縄文時代後期・晩期に属する土器片、石器、石製品、剝片等が大多数を占め、総数2005点の点数を数えた。今回遺物の取り上げに関しては、作業の迅速さと正確さを期して、現場では光波トランシットとコンピューターによる記録取り上げを採用した。回収の対象となる遺物の出土地区・種別・層位等をハンドヘルドに入力・計算させ、このデータをハンドヘルドからコンピューターにコンバートし作成したのが第7図の土器及び石器の平面及び垂直分布図である。これによると、B・C - 2区境界上に1つの集中区が見られるが、これはSK1の覆土及び床面に存在した土器片・石器等を表している。他は今回調査した遺跡の中央部を北から南へと特に集中がみられるということではなく、旧地形の等高線に沿うかのように遺物が分布している。これは垂直分布図にも顕著にあらわれている。また、D - 3区からF - 2・3区へと包含層中に多くの小砾を含む傾向が確認され、前述の遺物の平面及び垂直分布との兼ね合いから、かなりの部分が上部からの流れ込みの結果による包含層の堆積が考えられる。さらにはG区以南においては包含層が特に厚く形成されていることはこれを示唆するものと考えられる。調査時点では、包含層の上部及び下部に遺物の集中がみられ、大別時期差が想定されたので慎重な遺物の取り上げを行ったが、前記2点により二次堆積の可能性が高いことから時期別形態変化等の論議を進めることはできなかった。又、J・K区において急激に遺物の出土状況の散漫さがみられるが、当該区は山麓斜面の先端部であり、急斜であることよりかなりの土砂の流れが想定され、遺物の多くが攪乱、損失したと考えられる。



第6図 グリッド配置図及び遺構分布図



第7図 出土遺物平面・垂直分布図

2、検出された遺構（第6・8・9・10図）

S B 1（第8図） C-3区第II層上部で炉址のみ検出した。掘り込み面及び床面の検出はできなかった。炉址に使用されている河原石はすべて濃飛流紋岩製で、第II層を掘り込むような感を呈して組まれている。また、炉底部には少く残存程度の土器が敷かれていた。遺物の平面及び垂直分布図からみると、確かに遺物の分布については不安定な要素があり、炉址北半分が調査対象外地区のため不確実である等根拠は希薄であるが、炉が中央に位置するものと仮定するなら、約4m四方の住居の広さを想起することができる。

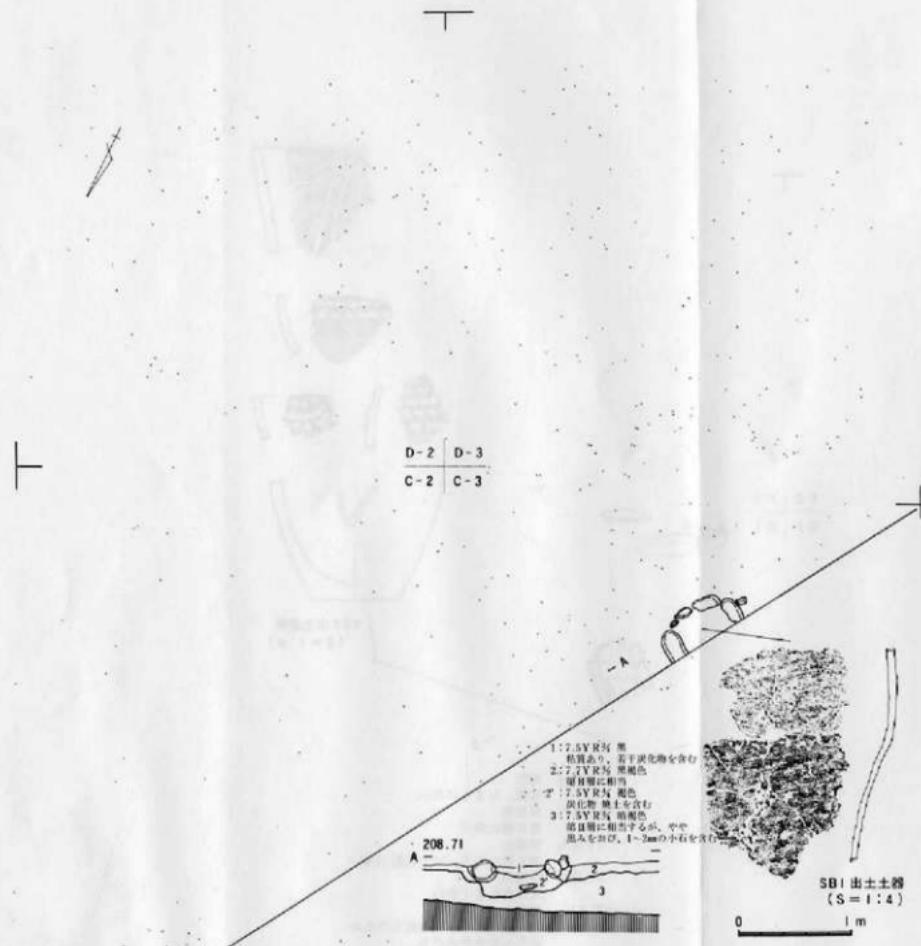
S B 2（第9図） F-G 1区第II層下部で炉址が検出され、その確認レベル面で面的に広げたところ、約1.1m北側で石列を検出した。この右列は確認されたレベル面等から炉址に付随するものと考えられ、その直線的な並びからS B 2を方形のプランをもつ住居として考えてよいかもしない。炉址南側より縄文時代後期に所属する小型の深鉢が出土している。また、周辺より切り日石錘が多数出土していることも注目に値する。炉址は4個の濃飛流紋岩製の河原石で組まれ、赤化が著しく破損している。

S K 1（第10図） B-C-2区第III層上面で検出された長軸1.4m、短軸1.1m、東西に長い梢円形のプランをもつ土壤である。確認面からは深さ約30cmを計り、床面は硬く叩きしめられたような感を呈していた。壁面の立ち上がりは急である。主な出土遺物として、床面直上から打製石斧が1点出土している。

S K 2（第10図） G-2区第III層上面で検出された長軸0.8m、短軸0.6mの若干東西に長い梢円形のプランをもつ土壤である。確認面からの深さは約10cm程度で、S K 2の上を覆い被せるように濃飛流紋岩の河原石が2点出土しており、以上2点から掘り込み面は上方に想定され、おそらくS B 2に伴う土壤としての機能を考えられる。

S K 3（第10図） G-2区第II層上面で確認された長軸1m、短軸0.8m東西に若干長い梢円形のプランをもつ土壤である。S B 2との切り合い関係があり、S B 2をS K 3が切っている。東隅に一段低い低面が存在しており、二基存在する可能性があるが確認できなかった。一段低い低面を覆い被せるように3個の濃飛流紋岩製の河原石が出土している。

P 1（第10図） H-0区第III層上面で性格不明のピットが1基検出された。出土遺物は皆無で性格も不明である。



第8図 繩文時代SB 1及び周辺遺物平面・垂直分布図

207.5m

-A



207.4m

-B

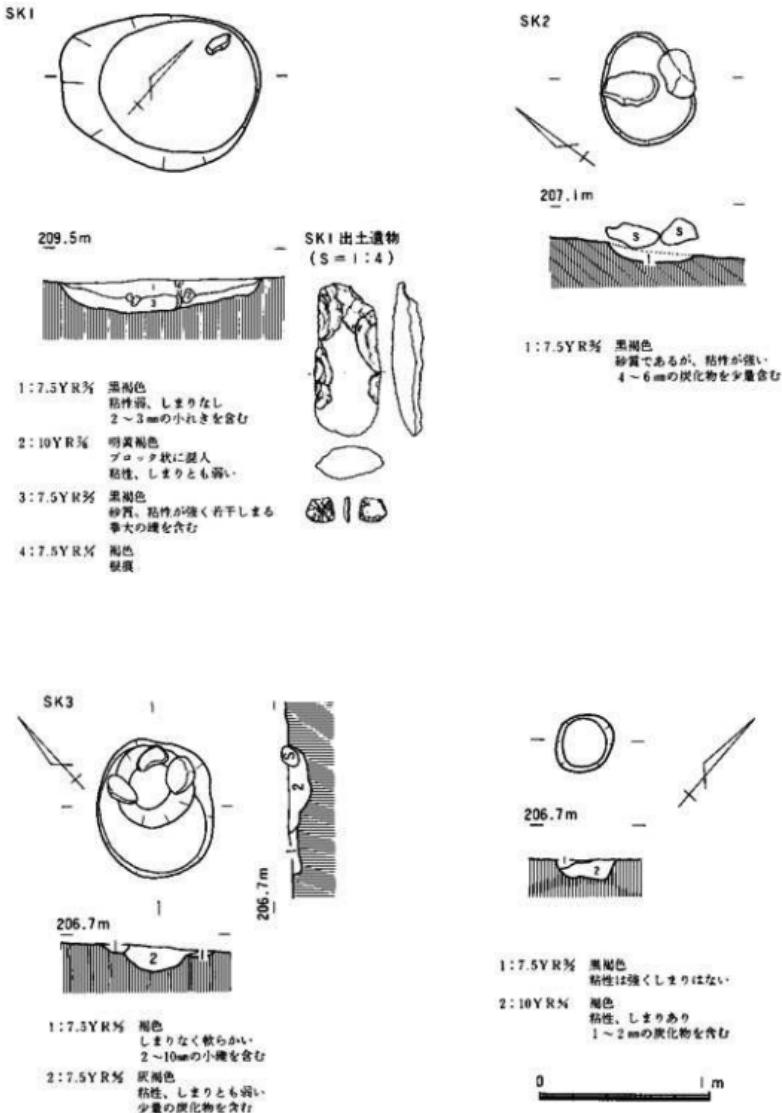
-A

0

1m

-B

-A



第10図 總文時代土壙及びピット

3、出土した土器

今回の調査における土器の出土量は、コンテナ箱にして約10箱程度である。出土数量は多いとはいえないが、時期的には、縄文時代中期から古墳時代前期にいたる多様な内容を包括している。所属時期別の出土比率では、大部分を縄文時代後・晚期が占め、弥生時代、古墳時代の土器が、若干存在する。

全体の器形・文様構成の把握できる資料は稀有であり、また包含層そのものについても二次堆積等の可能性が強いので、本項では従来の編年研究をもとに本遺跡から出土した土器を3群に分け、さらに、調整・文様構成等の観点から以下のように細分し、その概要を記す。

第I群土器 縄文時代中期の土器

第II群土器 縄文時代後期の土器

A類 堀之内式系の土器

B類 加曾利B式系の土器

第III群土器 縄文時代後期の土器

A類 寺津式系の土器

B類 元刈谷式系の土器

C類 西之山～桙王式系の土器

第I群土器（第11図1 図版8）

1のみを図示した。口縁部の直下に爪形文をもち、船元式に比定できる。

第II群土器（第11図2～31、第12図32～59、第13図60～68、第14図86～94、第15図108・113

第16図118～121、図8、9、10）

A類（第11図2～31、第12図32～59、第13図60～68、第15図113）

a類（第11図2～24）

磨消縄文をもつものを本類に含めた。沈線は、巻貝で施文されたものが多く、区画構成は、二本を一組にして並行に引くもの、円形となるもの、コの字状になるものと多様である。2は口縁部に縄文に施文した後に、沈線を渦巻状にひいた堀之内式の典型的な例であろう。6は、波状口縁をなす。21、22、23は、疑似縄文が施されている。7は磨滅して縄文が明確ではないが、本来、沈線区画内に縄文があるものとして、本類とした。

b類（第11図25～31、第12図22～46、第15図108・113、第16図118～121）

沈線・刺突系の文様をもつものを本類とした。沈線文は、a類同様巻貝で施文されたものが多く、文様構成もa類と近似しているが、25、28は山形文、43は連弧文風である。ま

た、45は入組文風で、a類の可能性もある。31は、二本の横位の沈線を平行に引き、真中に1本の沈線をひいて横位の沈線を区切っており、本類の中では、特異な例である。口縁部のつくりも、少し内湾気味に立ち上がり端部を肥厚させていることから、縄帶文系の土器として細別できるかもしれない。刺突系の文様をもつものとしては、30、46があげられる。30は、口縁端部に円形の刺突文、口縁直下の縦位の一本の沈線をもち、これをはさんで「ハ」の字状の沈線に二組施す。46は円形の押圧を加えた貼付文の周囲に縦位の凹線をもつ。30、46は逆「く」の字状の肥厚した口縁をもつ29を含めて、堀之内式期によくみられる資料である。SB2から出土した118～120は同一個体で、半截竹管で施文され、その文様のモチーフは特異である。口縁部は、連弧状に沈線を描き(118)、上段の押引文は右回り、下段は左回りに施文されている。これと同じく、胸部上段の押引文は右回り(119)、下段は左回りに施文されている(120)。121は巻貝によって条痕様あるいは連弧文風の沈線がひかれている。これらのSB2から出土した土器は、一括性の高い資料である。しかし、103は堀之内～加曾利B式の範疇で捉えられるが、118～121の顕著な半截竹管の使用は、元刈谷式期の特徴的な手法であり、121のモチーフも特異であり、矛盾した要素を併せもっている。一応本遺跡から出土した土器の大半がII-A類であることから、SB2出土土器も本類として分類したが、前述のように多くの問題点がある。

c類（第12図47、48、50～55）

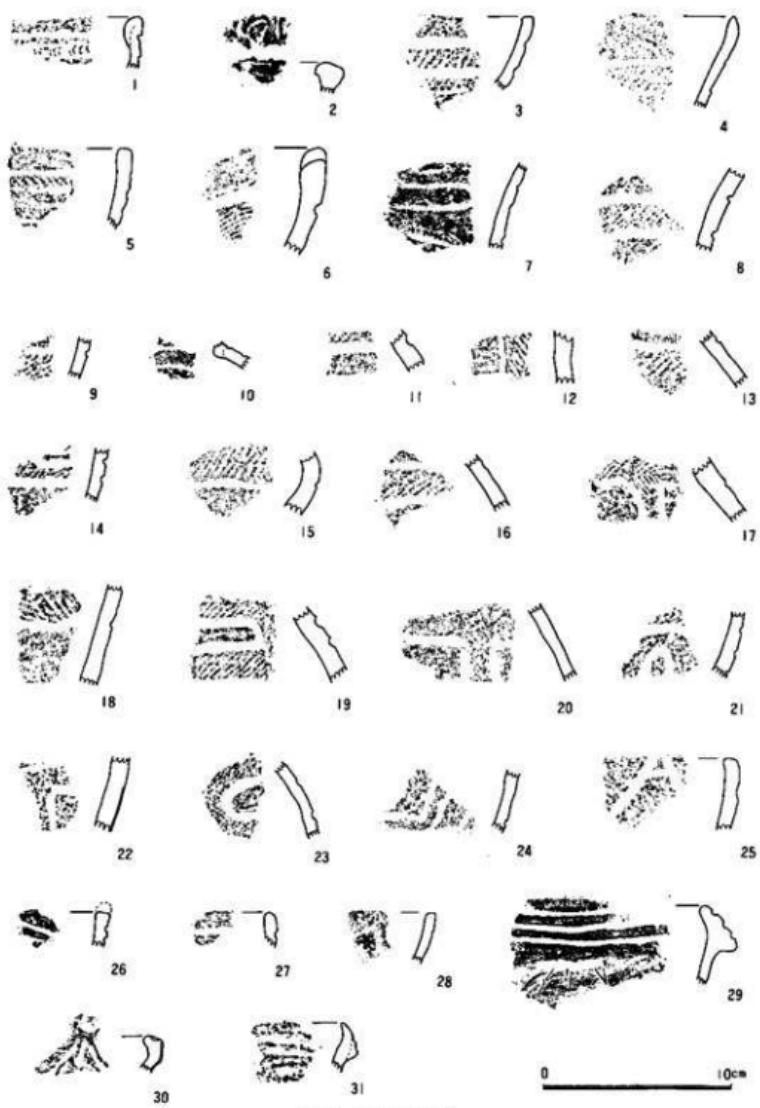
凸帯をもつもの、凸帯上に押引文をもつものを本類として分類した。押引文を有するものとしては、47、50、52、55があり、52は凸帯より上位には縄文が観察される。55は、晩期に所属する可能性も否定できない。51、53、凸帯の形状が鋭利で、凸帯上に強いヨコナデの痕が残り、口縁が若干内湾して立ち上がるなど、共通した要素をもつが、51は二条の凸帯間に二本一組の沈線を施す。

d類（第12図56～59）

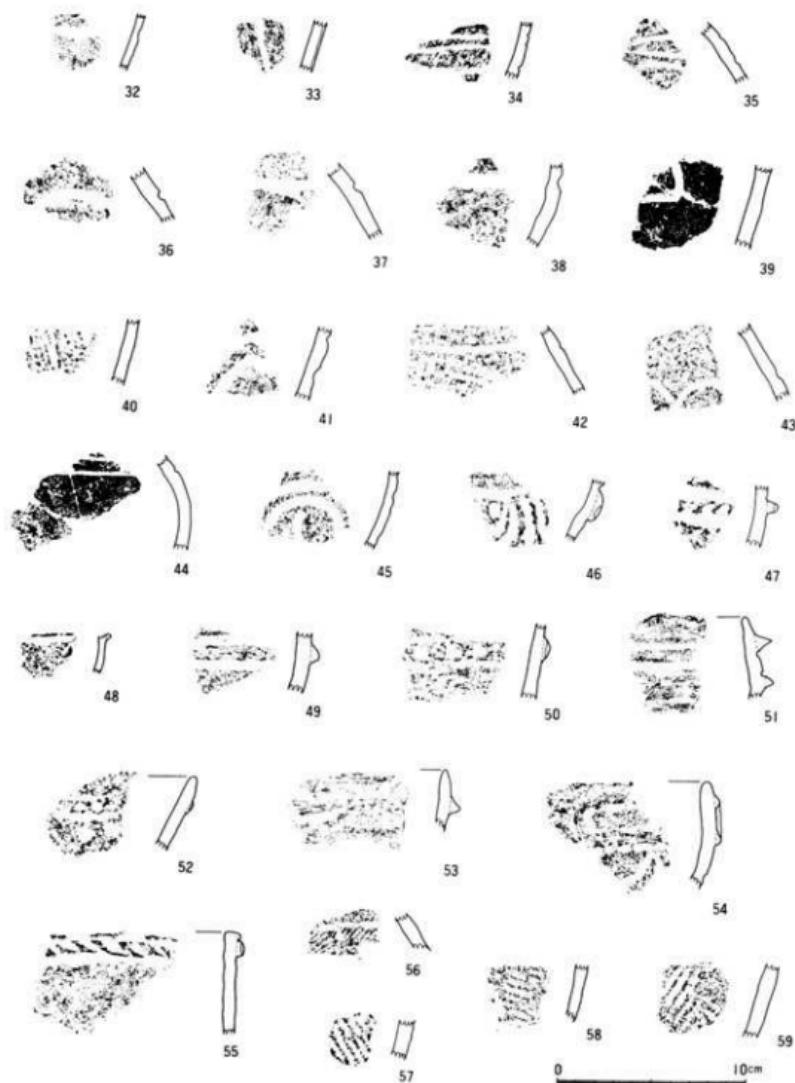
縄文のみしか認められなかったものを本類とした。実際には、所属時期が不明な例も含み、59は羽状縄文を施している。

e類（第12図49、第14図86～94）

丁重なミガキを調整すると無文精製土器を本群の土器とした。器形としては、大半が浅鉢になると思われ、94は壺であろう。口縁部が内湾気味となるもの(90～93)が目立ち、なかには、肥厚するもの(91、92)もある。無文であるため正確な時期については不明と言わざるをえない。



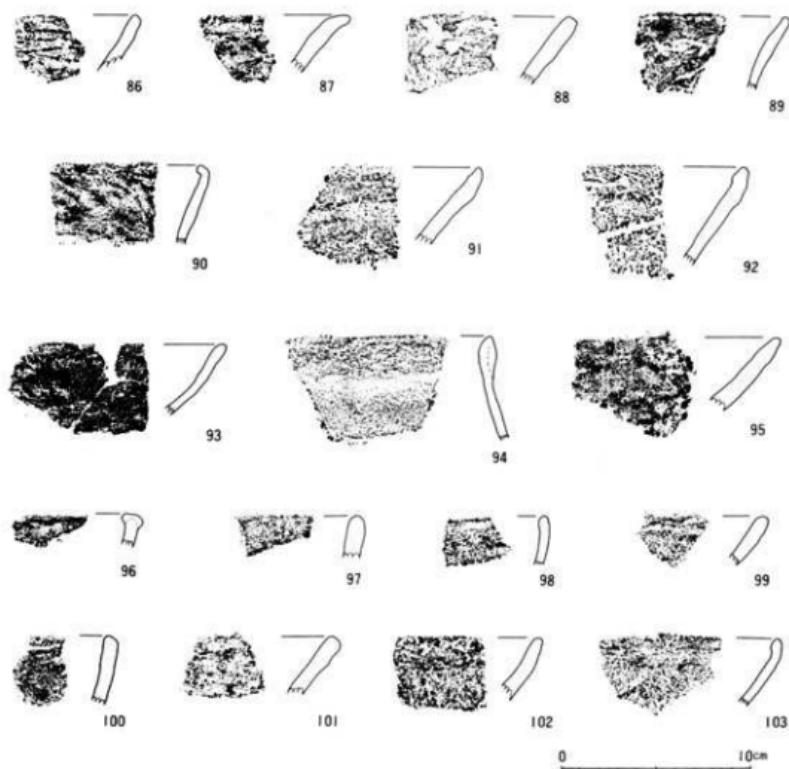
第11図 裝文土器(1)



第12図 繩文土器（2）



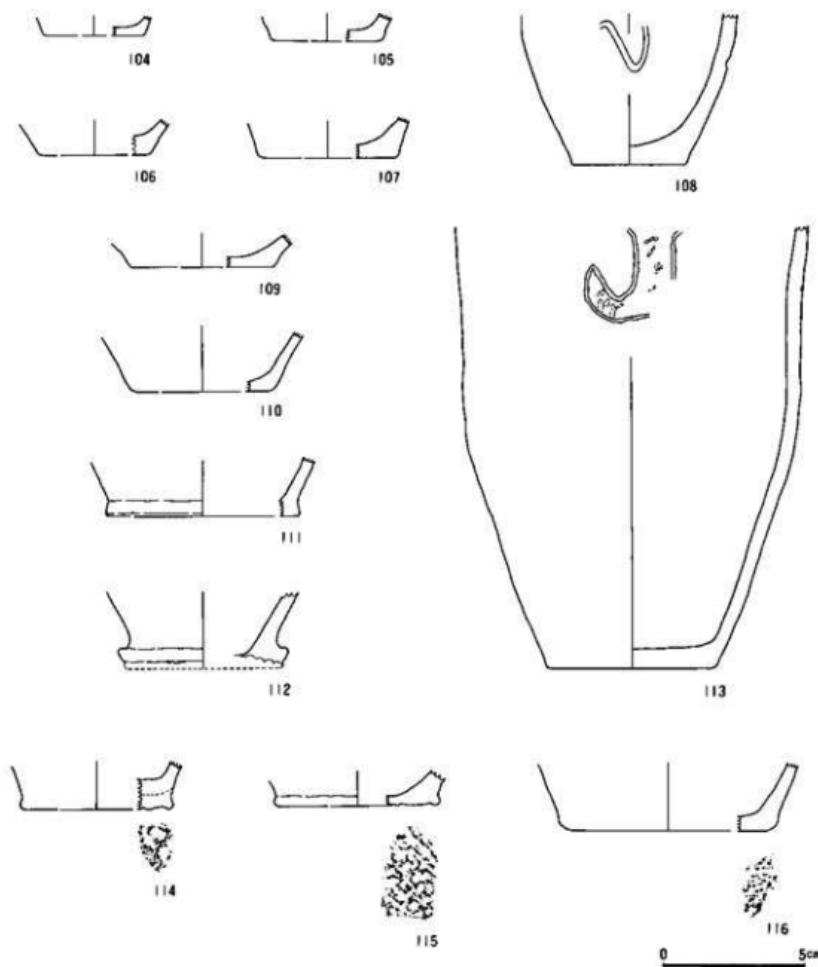
第13図 繩文土器(3)



第14図 縄文土器(4)

f類(第13図60~66、第14図95~103、第16図117)

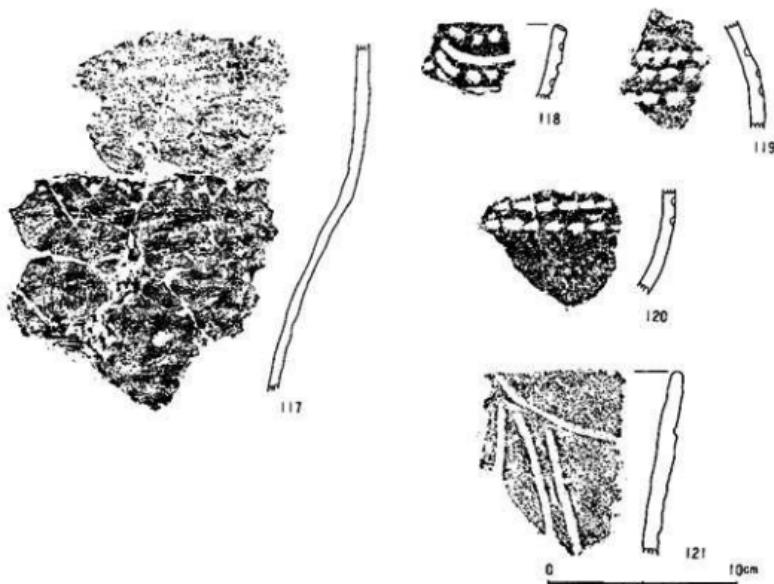
無文の粗製土器(95~103, 117)と、条痕系の土器(60~66)を一括して本類に含めた。無文であるため、型式が把握できないが大半を占める。条痕の工具は多種で、本群の土器のなかで、最も出土量が多いと思われる。64, 65は、むしろ凹線の近い特徴をもつ。無文の粗製土器は浅鉢・鉢形の器形をなすものが多いと想定される。117はS B 1から出土したものである。



第15図 織文土器（5）

B類（第13図67、68）

2点図示した。68は良好な資料で、文様のモチーフが把握できる。67は磨滅が激しいが、磨消織文をもつ。



第16図 縄文土器（6）

第三群土器（第13図69～85 図版8）

A類（第13図69～76）

ほとんどが、口縁が逆「く」の字状を呈するか、肥厚した口縁をもち、その直下に凹線が數本ひかれ、寺津式としての特徴を有す。しかし、文様帶の幅がせまく、凹線も巻貝で施されたか疑問が残り、寺津式の特徴と一致しない部分も認められる。69は横位の凹線内に縱位の押圧文がみられ、宮滝式の影響が想定できる。76は凹線の幅が広く、本類では例外的な存在である。

B類（第13図77～82）

半截竹管による刺突文・押引文をもち、元刈谷式に比定できる資料である。

C類（第13図83～85）

3点図示した。83は荒い条痕をもち、84は西之山式に近い。85は口縁端部強いヨコナデが認められ、穿孔途中の孔が認められる。85は櫻王式に近似する内容をもっている。

底部 (第15図104~107、108~112、114~116)

巨視的にみて、底部からの立ち上がりが60°ぐらいの角度で外反するものと、やや内湾しながら外反するものの2種に細別できる。前者は器厚が薄く、ミガキ系のものが多いことから、精製土器の底部、後者は器厚が厚く、つくりも雑なものが多く、粗製土器の底部であると推測できる。115、116には銅代痕、114にはヘラの刺突が底部に認められた。

表-1 土器観察表 (1)

図No	地区	層位	登録No	色調	表面裏面の文様・調整	備考
1	C 3	II U	2005	表: 10YR8/2 裏: 10YR8/2	表面: ナデ、爪形文(竹管) 裏面: ナデ	
2	D 2	II L	715	表: 7.5YR6/8 裏: 7.5YR5/4	表面: 磨き 裏面: ナデ 口縁: 通巻状沈線、縄文	
3	F 1	II L	1679	表: 5YR6/6 裏: 5YR6/6	表面: 磨消縄文(R L)、ナデ? 裏面: 磨き	
4	I 0	II L	1803	表: 10YR8/3 裏: 10YR6/3	表面: 磨消縄文(R L)、磨き 裏面: 磨き	
5	D 2	II U	43	表: 10YR7/3 裏: 10YR6/4	表面: 磨消縄文(R L)、磨き 裏面: 磨き	
6	D 2	II U	307	表: 10YR7/2 裏: 10YR8/4	表面: ナデ、山形の沈線、磨消縄文(R L)? 裏面: ナデ	波状口縁
7	K 1	II L	1644	表: 10YR8/4 裏: 10YR8/4	表面: 磨消縄文(R L) 裏面: ナデ	
8	G 1	II L	1211	表: 7.5YR8/4 裏: 7.5YR7/4	表面: 磨消縄文(R L) 裏面: ナデ	
9	J 1	II L	1491	表: 10YR7/3 裏: 10YR4/1	表面: 磨消縄文(R L) 裏面: 磨滅	
10	E 3	II U	806	表: 7.5YR6/4 裏: 7.5YR6/6	表面: 磨消縄文(L?)、磨き 裏面: ナデ	
11	D 3	II L	760	表: 10YR8/2 裏: 10YR8/2	表面: 磨消縄文?(沈線・卷貝、縄文・R L) 裏面: 磨滅	
12	H 2	II U	522	表: 5YR5/6 裏: 5YR6/6	表面: 磨消縄文(沈線・卷貝、縄文・R L)、ナデ 裏面: ナデ	
13	H 0	II L	1647	表: 10YR7/2 裏: 7.5YR7/4	表面: 磨き、磨消縄文(沈線・卷貝、縄文・R L) 裏面: 磨滅	ヌス付着
14	H 3	II U	608	表: 7.5YR7/6 裏: 10YR4/4	表面: 磨消縄文(R L)、磨き 裏面: 磨き	
15	I 1	II L	1822	表: 10YR6/4 裏: 10YR8/4	表面: 磨消縄文(R L?)、磨き 裏面: 磨滅	
16	H 3	II U	585	表: 7.5YR6/1 裏: 10YR8/3	表面: 磨消縄文(R L) 裏面: 磨き	
17	H 3	II U	590	表: 10YR7/1 裏: 10YR8/2	表面: 磨消縄文(R L)、ナデ? 裏面: 磨滅	
18	H 2	II U	519	表: 10YR7/2 裏: 10YR8/2	表面: 磨消縄文(R L)、磨き? 裏面: 磨滅	
19	C 2	I	—	表: 10YR8/1 裏: 10YR8/1	表面: 磨消縄文(沈線・卷貝、縄文・R L)、磨き? 裏面: 磨滅	
20	G 1	II L	1248	表: 10YR5/3 裏: 10YR8/3	表面: 磨消縄文(沈線・卷貝、縄文・R L)?、ナデ 裏面: 磨滅	ヌス付着

表-2 土器觀察表 (2)

図No	地区	層位	登録No.	色調	表裏面の文様・調整	備考
21	G 2	II U	459	表: 10YR8/3 裏: 10YR7/4	表面: 磨消繩文 (R L) 裏面: ナデ	
22	G 1	II L	1208	表: 5YR4/6 裏: 5YR3/3	表面: ナデ、磨消繩文 (疑似繩文) 裏面: ナデ	
23	H 3	II L	1919	表: 10YR6/1 裏: 10YR6/2	表面: 磨消繩文 (沈線・巻貝、疑似繩文)、磨滅? 裏面: ナデ	スス付着
24	G 3	II L	1413	表: 7.5YR7/6 裏: 7.5YR7/8	表面: 磨消繩文 (疑似繩文)、磨滅 裏面: 磨滅	
25	D 3	II U	111	表: 10YR7/3 裏: 10YR8/4	表面: 山形状の沈線、磨滅 裏面: 磨滅	
26	I 1	II U	1140	表: 5YR7/6 裏: 5YR6/6	表面: ナデ、斜位の沈線 2 本 裏面: ナデ	波状口縁?
27	G 2	II U	441	表: 10YR6/3 裏: 10YR6/3	表面: 磨き、横位の沈線 裏面: 磨き	スス付着
28	E 0	I	—	表: 10YR5/2 裏: 10YR5/1	表面: 山形の沈線、磨き 裏面: ナデ	
29	D 2	II U	131	表: 7.5YR5/4 裏: 7.5YR5/6	表面: 横位の沈線 (棒)、磨き 裏面: ナデ、削り	
30	G 1	II U	1192	表: 5YR7/4 裏: 2.5YR6/6	表面: 縦位の沈線両側にハの字状の沈線 2 本 裏面: ナデ 口縁: 刺突	
31	F 3	II U	856	表: 10YR6/6 裏: 10YR6/6	表面: 横位の沈線 2 本・縦位の沈線 1 本、ナデ 裏面: ナデ	
32	G 1	II L	1900	表: 10YR7/2 裏: 10YR8/3	表面: 横位の沈線 1 本、磨滅 裏面: 磨滅	
33	D 2	II U	167	表: 10YR8/3 裏: 10YR8/4	表面: 縦位の沈線 1 本、磨滅 裏面: 磨滅	
34	C 3	II U	128	表: 10YR4/3 裏: 10YR7/4	表面: 横位の沈線、磨滅 裏面: 磨き	
35	F 4	I	—	表: 10YR5/1 裏: 10YR7/3	表面: 横位の沈線 3 本、磨滅 裏面: 磨滅	
36	H 2	I	—	表: 7.5YR7/4 裏: 10YR8/4	表面: 弧状の沈線、ナデ 裏面: ナデ	
37	F 3	I	—	表: 10YR8/2 裏: 10YR8/3	表面: 横位の沈線 1 本 (巻貝)、磨滅 裏面: 磨滅	
38	C 3	II U	26	表: 10YR8/3 裏: 10YR7/3	表面: 横位の沈線 1 本 (巻貝)、磨滅 裏面: 磨滅	
39	B 2	II L	684	表: 7.5YR5/3 裏: 10YR8/2	表面: 沈線、ナデ 裏面: 磨滅	
40	H 0	II L	1972	表: 10YR8/4 裏: 10YR6/4	表面: 縦位の沈線・円形の沈線 (櫛状工具)、磨滅 裏面: 磨滅	
41	G 1	II L	1236	表: 7.5YR4/4 裏: 7.5YR4/4	表面: 滾巻状の沈線 (巻貝)、ナデ 裏面: ナデ	
42	D 4	II U	181	表: 10YR5/3 裏: 10YR6/4	表面: 横位の沈線、ナデ 裏面: ナデ	
43	O 3	II U	109	表: 10YR8/4 裏: 10YR8/3	表面: 連弧状の沈線、ナデ 裏面: ナデ	
44	G 1	II L	1498	表: 7.5YR7/3 裏: 10YR8/3	表面: 横位の沈線 (巻貝)、ナデ 裏面: 磨滅	スス付着
45	F 2	II L	1729	表: 10YR7/3 裏: 10YR8/4	表面: 滾巻状の沈線、ナデ 裏面: ナデ	
46	D 3	II L	943	表: 7.5YR5/6 裏: 10YR4/4	表面: 横位の沈線 1 本、突帯上刺突、縦位の沈線、磨滅 裏面: 磨滅	
47	H 1	II L	1466	表: 10YR7/4 裏: 10YR7/4	表面: 突帯上刺み、ナデ 裏面: ナデ	

表-3 土器觀察表 (3)

図No	地区	層位	登録No	色調	表裏面の文様・調整	備考
48	F 4	I	—	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R4/1	表面: 突帯、ナデ? 裏面: ナデ?	
49	G 1	II L	1899	表: 10Y R8/2 裏: 10Y R5/1	表面: 突帯、磨き 裏面: 磨き	
50	I 1	II L	1542	表: 10Y R8/2 裏: 10Y R8/2	表面: ナデ? 突帯上押引き 裏面: ナデ?	
51	H 2	II U	580	表: 10Y R7/6 裏: 10Y R7/6	表面: ナデ、突帯、横位の沈線 2 本 裏面: ナデ?	
52	I 2	II U	644	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R8/3	表面: 調文、突帯上の刺突、磨滅 裏面: 磨滅	
53	F 3	II U	371	表: 10Y R7/6 裏: 10Y R7/8	表面: ナデ、突帯 裏面: ナデ	
54	G 2	II U	463	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R8/1	表面: 複雑な区画文? 沈線(波状)? 裏面: 磨滅	
55	C 3	II U	10	表: 10Y R3/1 裏: 7.5Y R6/8	表面: 突帯上刻み(ヘラ)、ナデ 裏面: 磨滅	
56	G 2	II L	1402	表: 2.5Y R7/6 裏: 5Y R7/6	表面: 調文(R L) 裏面: 磨滅	
57	G 1	I	—	表: 10Y R8/2 裏: 10Y R8/8	表面: 調文(R L) 裏面: 磨滅	
58	D 2	II L	720	表: 5Y R7/4 裏: 5Y R6/4	表面: 調文(R L) 裏面: ナデ	
59	F 3	II U	372	表: 5Y R7/4 裏: 5Y R6/4	表面: 羽状繩文 裏面: ナデ	
60	C 2	II L	695	表: 5Y R5/6 裏: 5Y R5/8	表面: 条痕(櫛条工具?)、ナデ 裏面: ナデ	
61	H 1	II L	1317	表: 10Y R7/4 裏: 10Y R8/6	表面: 条痕(竹管)、ナデ 裏面: 磨滅	
62	C 2	II L	690	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R5/1	表面: 条痕 裏面: 磨滅	
63	I 3	II U	657	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R4/1	表面: 条痕(櫛条工具) 裏面: ナデ	
64	G 2	II U	412	表: 10Y R7/4 裏: 10Y R5/3	表面: 条痕? 裏面: 磨滅	
65	F 2	II U	336	表: 10Y R8/1 裏: 10Y R7/3	表面: 条痕 裏面: ナデ	
66	G 2	II U	413	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R4/3	表面: 条痕(櫛条工具)、ナデ 裏面: ナデ	
67	G 2	II L	1975	表: 10Y R8/2 裏: 10Y R8/3	表面: 磨消繩文(R L)?、磨滅 裏面: 磨滅	S K3 出土
68	G 2	II U	430	表: 10Y R4/3 裏: 10Y R5/4	表面: 磨消繩文(R L) 裏面: ナデ	
69	H 2	II U	556	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R7/3	表面: 横位の凹線 3 本(巻貝)、刺突 裏面: ナデ	
70	D 3	II L	758	表: 7.5Y R7/6 裏: 7.5Y R8/8	表面: 横位の凹線 2 本、磨滅 裏面: 磨滅	
71	D 3	II L	940	表: 7.5Y R8/6 裏: 7.5Y R8/6	表面: 横位の凹線 2 本、磨滅 裏面: 磨滅	
72	G 0	I	—	表: 5Y R7/4 裏: 5Y R6/6	表面: 横位の凹線 2 本、磨滅 裏面: 磨滅	
73	B 2	II L	922	表: 10Y R8/4 裏: 10Y R8/4	表面: 横位の凹線 3 本(巻貝?) 裏面: 磨滅	
74	F 4	I	—	表: 10Y R8/2 裏: 10Y R6/1	表面: 横位の凹線 3 本、磨滅 裏面: 磨滅	

表-4 土器觀察表 (4)

図No	地区	層位	登録No.	色調	表裏面の文様・調整	備考
75	C 2	II L	689	表: 10Y R8/4 裏: 10Y R8/4	表面: 横位の凹線3本(巻貝)、磨き 裏面: ナデ	
76	H 2	II L	908	表: 10Y R5/4 裏: 10Y R5/4	表面: 横位の凹線2本、磨滅 裏面: 磨滅	
77	D 2	II L	706	表: 10Y R6/3 裏: 10Y R8/4	表面: 押引き(竹管)、ナデ 裏面: ナデ	
78	E 1	II L	1010	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R7/1	表面: 押引き(竹管)、磨滅 裏面: 磨滅	
79	F 1	II L	1020	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R8/4	表面: 刺突(竹管)、ナデ 裏面: ナデ	
80	I 9	I	—	表: 7.5Y R5/3 裏: 10Y R8/3	表面: ナデ、横位の凹線3本(巻貝) 裏面: ナデ	
81	H 2	II U	576	表: 10Y R6/3 裏: 10Y R5/1	表面: 横位の沈線、刺突(竹管)、削り 裏面: ナデ	
82	F 2	II L	833	表: 10Y R8/4 裏: 10Y R8/3	表面: 押引き(竹管)、ナデ 裏面: ナデ	
83	E 3	I	—	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R8/2	表面: 条痕(荒いミガキ状) 裏面: 磨滅	
84	E 3	II U	266	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R6/4	表面: ナデ 裏面: ナデ 口縁: 刺突(ヘラ)	
85	D 2	I	—	表: 10Y R5/3 裏: 10Y R6/4	表面: 条痕(二枚貝)、ナデ 裏面: 磨滅	穿孔
86	I 0	II L	1106	表: 7.5Y R6/2 裏: 7.5Y R7/4	表面: 磨き? 裏面: ナデ	
87	G 3	II U	484	表: 7.5Y R7/3 裏: 7.5Y R7/6	表面: ナデ 裏面: 磨き?	
88	F 2	II L	1451	表: 7.5Y R5/3 裏: 7.5Y R8/3	表面: 磨き 裏面: 磨き	
89	G 1	II L	1911	表: 7.5Y R6/3 裏: 7.5Y R8/4	表面: 磨き 裏面: 磨き	
90	D 3	II L	777	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R8/4	表面: 磨き? 裏面: ナデ	スス付着
91	E 3	II L	817	表: 7.5Y R7/4 裏: 7.5Y R7/4	表面: 磨滅 裏面: 磨滅	
92	C 3	II U	30	表: 7.5Y R7/3 裏: 7.5Y R6/3	表面: 磨き、ナデ 裏面: 磨き	スス付着
93	G 2	II U	873	表: 10Y R8/1 裏: 10Y R8/2	表面: ナデ? 裏面: ナデ?	
94	F 4	I	—	表: 5Y R7/6 裏: 5Y R7/6	表面: 磨き 裏面: 磨き	スス付着
95	E 2	II L	954	表: 10Y R8/2 裏: 7.5Y R8/3	表面: 磨滅 裏面: 磨滅	
96	I 2	II L	1472	表: 7.5Y R7/6 裏: 7.5Y R8/4	表面: ナデ 裏面: ナデ	
97	E 1	II L	1009	表: 7.5Y R7/6 裏: 7.5Y R7/4	表面: ナデ 裏面: ナデ	
98	E 2	II L	955	表: 10Y R6/2 裏: 7.5Y R5/4	表面: ナデ? 裏面: ナデ?	
99	D 3	II L	744	表: 7.5Y R6/6 裏: 7.5Y R5/6	表面: 磨滅 裏面: ナデ	
100	C 2	II U	156	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R7/3	表面: ナデ 裏面: ナデ	

表-5 土器観察表 (5)

団No	地区	層位	登録No.	色調	表裏面の文様・調整	備考
101	I 3	II U	656	表: 10Y R8/2 裏: 2.5Y R8/3	表面: ナデ? 裏面: ナデ?	
102	E 3	II U	262	表: 10Y R8/1 裏: 10Y R8/2	表面: 磨滅 裏面: 磨滅	
103	E 3	II U	281	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R8/4	表面: 磨滅 裏面: 磨滅	
104	G 2	II U	468	表: 5Y R6/8 裏: 7.5Y R7/6	表面: 磨滅 裏面: 斧き? 底部: 磨滅	
105	I 2	II L	1315	表: 5Y R6/8 裏: 7.5Y R7/4	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: ナデ	
106	F 2	II L	1600	表: 10Y R7/6 裏: 10Y R6/4	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: ナデ	
107	E 3	II U	276	表: 7.5Y R6/6 裏: 7.5Y R7/6	表面: 磨滅 裏面: 磨滅 底部: 磨滅	
108	H 3	II L	1649	表: 7.5Y R6/6 裏: 7.5Y R7/6	表面: 弧状の沈線、ナデ 裏面: ナデ 底部: 磨滅	SB2 出土
109	F 1	II L	1017	表: 7.5Y R7/8 裏: 7.5Y R5/2	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: ナデ	
110	F 2	II U	400	表: 5Y R5/8 裏: 7.5Y R6/8	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: 磨滅	
111	E 2	II L	1808	表: 10Y R8/4 裏: 10Y R7/3	表面: 磨滅 裏面: ナデ 底部: 磨滅	
112	E 2	II L	1955	表: 7.5Y R7/3 裏: 10Y R6/2	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: 磨滅	
113	H 0	I	1976	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R7/3	表面: ナデ、弧状の沈線 裏面: ナデ 底部: ナデ、網代模?	
114	D 3	II U	756	表: 10Y R7/2 裏: 10Y R7/1	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: 刺突(ヘラ)	
115	G 2	II L	869	表: 10Y R7/3 裏: 10Y R7/3	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: 網代模	
116	D 3	II U	125	表: 10Y R8/4 裏: 10Y R8/3	表面: ナデ 裏面: ナデ 底部: 網代模	
117	C 3	—	2004	表: 5Y R5/8 裏: 7.5Y R6/8	表面: ナデ 裏面: 磨滅	SB1 出土
118	H 3	II L	1649	表: 10Y R6/3 裏: 10Y R7/3	表面: 連弧文?・押引き(竹管)、ナデ 裏面: ナデ 口縁: 刺突(ヘラ)	SB2 出土
119	H 3	II L	1649	表: 10Y R6/3 裏: 10Y R5/1	表面: 押引き(竹管)、ナデ 裏面: ナデ	SB2 出土
120	H 3	II L	1649	表: 10Y R6/2 裏: 10Y R5/1	表面: 押引き(竹管)、ナデ 裏面: ナデ	SB2 出土
121	H 3	II L	1649	表: 10Y R8/3 裏: 10Y R8/4	表面: 連弧文?・継ぎの沈線(巻貝)、ナデ 裏面: ナデ	SB2 出土

4、出土した石器・石製品

本遺跡の発掘調査では、725点の石器・石製品が出土した。その内訳は、有舌尖頭器1点、石錐18点、石錐13点、削器8点、ピエスエスキュー5点、ヘラ形石器9点、RF8点、UF19点、石核21点、打製石斧86点、礫石錐5点、切目石錐19点、剝片・碎片509点、石刀1点、磨製石斧2点、石皿片2点、磨石5点、凹石3点である。出土資料の85%が打製石器とその製作に係わったものと考えられる資料である。石材は90%以上をチャートが占め、他に若干安山岩・黒曜石・頁岩等が利用されている。現地調査の時点では包含層が厚く形成されており、遺物が包含層の上部及び下部に集中して検出され、大別時期区分が予測されたので、慎重に記録しながら遺物の取り上げを実施した。が、その後の検討により包含層そのものが二次堆積の可能性が強まり、明確な時期区分は不可能であることが判明した。ここでは併出している土器形式より、縄文時代後期から晩期にかけての製作・使用・廃棄されたものとして一括して取り扱うが、必ずしも石器自体が帰属する所属時期の一括性を示すものではない。

以下各器種ごとの石器分類を中心として説明する。²⁾

有舌尖頭器（第17図1 図版11）

1点のみ出土。先端部及び下部が欠損しており残存部分は約3/4程度と考えられる。逆刺の形態は不明であるが、細身のタイプで、両面とも並列剝離によって調整されている。薄身で断面は凸レンズ形である。

表 6 有舌尖頭器属性表²⁾

No.	出土 土 区	層位	遺物 番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	最大幅 の位置	側 縁 左 右	残存 部位	分類	挿図
					長	幅	厚						
1	I 1	II L	1149	チャート	(30)	(18)	7.7	4.6	?	a a	B	I	17-1

石錐（第17図2～18 図版11）

出土数18点のうち、黒曜石製1点、安山岩製1点を除く他はすべてチャート製である。分布については、遺跡全体にまばらに分布している。以下各形態ごとにその特徴を述べる。

I a類（第17図2～7）

6例ある。丸味を帯びた深い抉りの入るもので平面形は二等辺三角形を呈す。最大長2cm前後の2、3、5、6と、最大長1.3cm前後の4、7、との2種に大別できる。2は裏面に大きく素材の剝離面を残す。3は透明感のある黒曜石製で脚部を欠損している。5は細かい並列剝離によって調整され、脚部は素材となった剝片の形状を残し裏面へと内湾する。6はおそらく横長の剝片を素材とし、裏面は右側縁を中心に調整を加え整えている。4、7、小型品で、4は側縁が鋸歯状となる。7は裏面に素材剝片の剝離面を残している。

I b 類 (第17図8)

1例のみ。「く」の字状の抉り込みの入るもので、正三角形を呈し非常に細かい調整を加え薄手の作りとする。銳利な先端部および脚部を作りだしている。

I c 類 (第17図9~11)

3例ある。半円形のわずかな抉り込みが入るもので平面形は二等辺三角形を呈す。9、10は素材の厚みを調整で減することなくやや厚手なつくりとなっている。

I d 類 (第17図12~14)

3例ある。凹状のわずかな抉り込みが入るものである。14は安山岩製で裏面に大きく素材の剥離面を残す。12は先端部付近に抉りに近い剥離が施されているため、突出した先端部を持つ感を受ける。13は特に底面左側縁に細かい調整を加えている。

II 類 (第17図15・16)

2例ある。基部が直線状をなすものである。15は表採資料であり、大型で厚手な作りである。16は安山岩製で先端部を欠損する。

VII b 類 (第17図17・18)

3例含まれる。未製品あるいは欠損品と考えられる一群である。2例図示した。17は正面は左側縁から、裏面は右側縁から細かい調整加工を施している。基部側の切断面に一部調整を加えているが、途中で放棄してある。18はSKI出土で、縦長剝片を素材として内面縁に細かい調整を加えているが、加工途中で先端部を欠損したものと考えられる。

表-7 石器属性表¹⁾ (1)

No	出土区	層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	抉深 (基長)	最大幅の位置	折損部位	分類	挿図
					長	幅	厚						
1	J K	擾乱層	——	チャート	23	(12)	2.7	0.5	-8	B	c	I a	17-2
2	G 1	II L	1898	黒曜石	(22)	(19)	3.4	0.5	-5	B	b	I a	17-3
3	F 2	II U	354	チャート	13	(11)	3.0	0.3	-4	B	——	I a	17-4
4	H 2	II U	681	チャート	20	(11)	2.9	0.5	-7	B	c	I a	17-5
5	C 2	II U	4	チャート	22	22	2.5	0.5	-4	B	——	I a	17-6
6	F 1	II L	1674	チャート	(14)	(10)	1.9	0.3	-3	B	c	I a	17-7
7	U 1	II L	1669	チャート	20	18	2.5	0.6	-4	B	——	I b	17-8
8	A 0	II L	1737	チャート	25	18	5.8	2.2	-2	B	b	I c	17-9

表-8 石器属性表 (2)

No.	出土 区	層位	遺物 番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	抉深 (基長)	最大幅 の位置	折損 部位	分類	挿図
					長	幅	厚						
9	P 2	II L	680	チャート	26	(17)	5.6	2.0	-3	B	a, c	I c	17-10
10	E 2	I	—	チャート	(15)	(15)	3.2	0.8	(-2)	B	b, c	I c	17-11
11	C 2	II U	1754	チャート	(26)	(17)	4.5	1.6	-2	B	a	I d	17 12
12	F 3	I	—	チャート	20	17	4.8	1.4	-1	B	—	I d	17-13
13	E 3	II U	263	安山岩	23	16	5.9	2.0	-1	B	a	I d	17 14
14	表採資料	—	—	チャート	30	22	9.2	5.8	±0	B	—	II	17-15
15	E 0	I	—	安山岩	(13)	14	2.9	0.4	±0	B	a, b	II	17-16
16	I 1	II L	1921	チャート	21	19	5.7	2.0	?	B	d	VII b	17 17
17	S K1	—	1689	チャート	(18)	20	4.0	1.7	±0	B	a	VII b	17-18
18	I 3	I	—	チャート	17	16	2.7	0.8	-4	B	—	?	—

石錐 (第17図19~21 第18図22~31 図版11)

出土数13点のうち1点のみ安山岩製で、他は全てチャート製である。全体的に石錐と比較して厚手な剥片を素材として利用している。

I類 (第17図19~22 第18図22)

3例ある。剥片の一端に長い尖頭部を作り出し尖頭部と基部(=つまみ部)の機能の分化が明確なもの。19は素材となった剥片の形態を利用し尖頭部を作り出している。20は厚手で、先端部に細かいぶれが見られる。21は裁断面をもつ板状剥片を素材としている。先端部が欠損しているので明らかではないが、尖頭部末端は正面のみ調整が施されている。22は正面両側縁に調整を加えた後裏面右側縁に細かい剝離を加え先端部を作り出している。

II類 (第18図23~28)

13例ある。長い棒状の形態を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもの。両端に尖頭部を持つもの(23)と、一端に持つもの(24~28)がある。ほとんどが先端部を欠損するかもしくは磨耗が著しい。25は安山岩製でスパール状の剥片を素材としている。尖頭部のつぶれが著しい。27は細かい丹念な並列剝離を加え棒状を呈する典型的な形態であるが両端を欠損している。28は正面形は棒状とはいがたいが、尖頭部へ向かう直線的調整がみらるのでこの類に含めた。

III類 (第18図29~31)

3例ある。剥片の一部に尖頭部を作り出したもので、各形態の中では尖頭部の短いものを本類とした。素材となった剥片の形状を大きくとどめており、形態的統一性はみられない。29は石錐と形態的に似ているが尖頭部の磨耗痕が認められることによりこの類に含めた。すべて縦長剥片を素材としている。

表-9 石器属性表⁵⁾

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	尖頭部 (mm)				折損	分類	挿図
					長	幅	厚		長	幅	厚	断面形			
1	E 0	I	—	チャート	(22)	16	3.6	0.6	(11)	3	1.8	ひし形	先端	I	17-19
2	B 2	II L	1738	チャート	21	14	5.7	1.3	13	6	4.0	ひし形	—	I	17-20
3	I 1	II L	1297	チャート	(18)	12	5.1	1.5	(4)	5	2.0	三角形	先端	I	17-21
4	I 0	II L	1083	チャート	22	13	5.3	1.1	2	4	1.5	ひし形	—	II b	18-22
5	K 2	II L	682	チャート	27	10	5.6	1.4	9	5	4.8	ひし形	—	II b	18-23
6	F 1	I	—	チャート	(20)	9	5.0	1.2	(4)	3	3.2	三角形	先端	II b	18-24
7	G 2	II U	442	安山岩	29	7	6.7	1.4	4	4	2.5	三角形	—	II b	18-25
8	K 3	II L	1343	チャート	23	7	3.7	0.7	4	4	2.5	ひし形	—	II b	18-26
9	G 1	II U	1251	チャート	(28)	6	3.7	0.8	(3)	(4)	2.1	カマボコ形	先端	II c	18-27
10	B 2	II U	921	チャート	19	11	5.8	1.2	6	3	3.2	ひし形	—	II c	18-28
11	E 2	II L	727	チャート	25	15	4.0	1.4	4	5	2.2	凸レンズ形	—	III	18-29
12	E 2	II L	951	チャート	22	13	3.8	1.2	2	3	1.3	凸レンズ形	—	III	18-30
13	J 1	II L	1643	チャート	30	13	5.0	2.0	6	4	2.6	三角形	—	III	18-31

削器 (第18図37~34 図版11)

8例出土している。不定形であり、素材となった剝片の形状をそのままに反映している。刃部の作出については背面側に加工を施すもの(32)、腹面側に施すもの(33)、両面加工となるもの(34)があるが、調整は全体的に荒い。

表-10 削器属性表⁶⁾

No.	出土区	層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	加工部位と種類						折損	分類	挿図
					長	幅	厚		a	b	c	d	e	f			
1	D 3	II U	114	チャート	21	14	4.3	1.3	1A	—	—	1A	—	—	—	I a	
2	H 2	II U	514	チャート	23	26	5.8	3.7	1B	—	—	1C	—	—	—	I a	18-34
3	D 3	II L	944	チャート	64	45	14.9	41.2	—	1A	1A	—	—	—	—	I b	
4	F 1	II L	1015	チャート	(31)	40	12.2	13.2	—	1A'	1A'	—	—	—	下半分	I b	
5	H 3	II U	591	チャート	43	12	4.0	2.2	3C	—	—	—	—	—	—	III a	
6	E 1	I	—	チャート	50	23	1.3	12.6	—	3C	—	—	—	—	—	III b	18-32
7	I 2	II U	643	チャート	31	22	6.9	4.3	—	3B	—	1A	—	—	—	III d	18-33

ピエスエスキュー (第18図35~38、第18図39 図版11)

5例出土。35は安山岩の剝片を素材としている。正面下縁につぶれ状の階段上剝離が認められ裏面上縁には連続する小剝離痕がみられる。36は上・下端にわずかにつぶれ状の段階上剝離が認められる。断面は台形状を呈する。37は一方の側縁に上縁方向から裁断面が認められる。上縁にわずかにつぶれ状の段階上剝離が認められるが下縁に同様の段階上剝離が認められない。裏面左側に下縁から入る剝離痕がみられることから本来の下縁部が使用によって破碎されたものとして考えてよいかもしれない。38は小型の部類であり上・下端に非常に細かいつぶれ状の段階上剝離が認められる。一方の側縁は裁断面、他方は折断面となっている。39は安山岩製で

断面は台形状を呈する。上縁はつぶれ状を呈し下縁にはつぶれ状の段階上剥離が認められる。

表-11 ピエス・エスキュー計測表

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石 材	大きさ (mm)			重量 (g)	挿 図
					長	幅	厚		
1	H 0	II L	1027	安山岩	29	13	8.1	2.9	17-35
2	H 1	II L	1059	チャート	24	14	9.8	3.6	17-36
3	G 1	II U	1207	チャート	28	13	8.1	2.9	17-37
4	J 2	II L	1445	チャート	20	8	2.9	0.6	17-38
5	D 0	II U	1897	チャート	33	17	16.4	10.3	17-39

彫器（第19図40・41 図版11）

2例出土。40、41ともチャート製の板状の縦長剝片を素材としている。40は右側縁折断面より一度、41は下端の折断面より一度の槽状剥離を施し彫刀面を作り出している。

表-12 彫器計測表

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石 材	大きさ (mm)			重量 (g)	挿 図
					長	幅	厚		
1	C 2	I	—	チャート	26	26	8.1	6.5	18-40
2	G 1	II U	1203	チャート	28	21	5.5	4.9	18-41

ヘラ形石器（第19図42～49 図版11）

9例出土している。平面形は台形あるいは三角形を呈し、両側縁に折断面ないし截断面からなる狭小な側面を持ち、一端に微細な剥離痕ないし使用痕の認められる石器をヘラ形石器とした。46は一見搔器の刃部調整加工のような角度を持つ調整が加えられているが、一般的なそれと比べて本例は細か過ぎるのでこの類に含めた。形態的及び使用の統一性が想起されるものである。

表-13 ヘラ形石器計測表

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石 材	大きさ (mm)			重量 (g)	挿 図
					長	幅	厚		
1	H 2	II U	549	チャート	25	15	5.2	2.6	19-42
2	K 1	II L	1177	チャート	22	20	5.8	3.2	19-43
3	G 1	II L	1210	チャート	32	18	6.5	1.9	19-44
4	F 2	II U	1847	チャート	35	22	10.8	9.2	19-45
5	E 3	II L	1564	チャート	32	27	7.3	6.7	19-46
6	I 1	II L	1527	チャート	21	18	6.7	2.1	19-47
7	G 2	II L	1865	チャート	23	14	4.9	1.5	19-48
8	F 4	I	—	チャート	21	12	4.7	1.3	19-49
9	I 2	II U	630	チャート	12	14	3.0	0.4	

RF (第19図50 図版11)

8例出土。剥片に二次加工を施すが、刃部を形成するような連続した加工とならないものをRFとした。1点のみ図示したが、他もすべて最大長2~3cmの小型の部類に入る。

UF (第19図51、第20図52 図版11)

19例出土している。ここでは素材の鋭い縁辺に残された剥離痕が1mm以下で刃こぼれ状を呈するものをUFとした。52以外はすべてチャート製の小型の部類に入る。52は玢岩製で大型の横長剥片を素材とし右側縁及び下端に使用痕が認められる。

石核 (第20図53~55、第21図56~58、第22図59~61 図版12)

21例ある。1例のみ安山岩(52)製で他はすべてチャートであり、本遺跡の石器及び剥片類のチャート占有率と対応している。本来、遺跡に残された石核は残核と呼ばれるものであり、多くが剥片剝離作業最終的段階を意味するものであると理解されている。故に縄文時代においても石器製作過程の基盤に存在していたであろう剥片剝離技術解明へのアプローチの手段・方法としては限界があると考えられるが、一方ではまさに剥片剝離作業工程そのものを集約した結果の残りとして有効な情報を提示しているものと考え、当該期の剥片剝離技術を考えてみたい。以下に石核の形態ごとに説明する。

I類 (第20図53 第21図56・57 第22図60)

5例ある。厚手の板状剥片を素材とする。周辺部の平坦な剥離面ないしは礫表を打面として剥片剝離作業を行う。剥片剝離作業は正面に限定され90°ないしは180°の打面転移が行われている。打面の再生は見られない。やや幅広い貝殻状の不定形剥片を取る。

II類 (第21図58)

2例ある。厚手の幅広剥片を素材とする。打面は裏面を利用する。剥片剝離作業は正面に限定され、石核の中心に向かって作業が進行し、90°ないしは180°の打面転移が行われている。貝殻状の不定形剥片を取る。

III類 (第21図 57図)

4例ある。円礫を分割したサイコロ状の剥片を素材とする。礫表を打面として剥片剝離作業は正面のみに限られる。石核の大きさに対する作業面の広さは非常に小さい。小型の貝殻状剥片をとる。

IV類（第20図50 第22図459）

2例ある。円盤を分割したような厚手の剝片を素材とする。剝片剝離作業は正面及び裏面に及ぶ。故に一方の作業面が他方の剝片剝離作業における打面調整的役割を結果的に兼ねることになる。55は裏面上端→正面左側縁→裏面右側縁→正面上端へと打面を転移させて剝片剝離作業が進行している。59は裏面上端→正面下端→正面上端→正面右側縁へと打面を転移している。55は幅30cm長さ45mmの大型縦長剝片が剥取されているが、多くは幅広な貝殻状の不定形剝片を取る。

V類（第22図61）

5例ある。円盤を分割したような厚みのある剝片を素材とする。平坦な剝離面あるいは節理面を打面として剝片剝離作業を進行させ、作業は打面全周に及ぶ。打面転移は行わない。やや幅広な縦長剝片を取る。

VI類（第20図54）

3例ある。直方体状の剝片を素材とする。平坦な剝離面あるいは節理面を打面とする。打面は90°ないしは180°の打面転移を行っている。小型の不定形剝片を取る。

砾石錘（第23図62～64 図版12）

5例ある。いずれも円盤の長軸両端に1回～数回の剝離を加え、紐かかり部を作り出している。切り目の石錘と比較する形態的統一性は顕著ではない。

表-14 砾石錘計測表²⁾

No	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)				打欠き門		重量 (g)	挿図
					長1	長2	幅	厚	a	b		
1	D 3	II U	1772	砂 岩	76	72	44	20.3	12	10	84.2	23-62
2	D 3	II U	778	細粒砂岩	75	73	62	17.5	9	15	99.1	23-63
3	D 3	II L	748	砂 岩	49	47	45	17.7	12	6	45.2	23-64
4	D 2	II U	44	砂 岩	51	50	20	8.6	6	7	12.7	23-65
5	H 1	II L	1869	砂 岩	38	37	31	8.3	7	8	13.3	23-66

切り目石錘（第23図67～71、第24図73～83 図版12）

19例ある。破損品は5例のみであり、完形品のすべてが長軸両端に幅1～3mmの磨り込みを入れてある。82は正面のみ磨り込みが連続している。83は非常に小型の部類に入る。6点がS B 2の覆土（？）から出土しており、何らかの関係が想起される。正面形は長椭円形が多く12～26g前後のものと40～60g前後の2種に大別できる。

表-15 切り石錐計測表

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ (mm)			重量 (g)	挿図
					長	幅	厚		
1	F 1	I	—	砂岩	(28)	(30)	10.3	12.8	23-67
2	H 1	II L	1057	玢岩	42	31	19.1	26.2	23-68
3	G 1	II L	1962	玢岩	61	24	23.4	49.7	23-69
4	F 2	II U	351	頁岩	60	27	18.5	43.3	23-70
5	F 2	II U	850	砂岩	71	22	18.2	44.3	23-71
6	F 2	II U	341	砂岩	49	32	9.3	17.5	23-72
7	H 1	II L	1054	砂岩	75	43	23.1	90.7	24-73
8	G 2	II U	408	砂岩	73	38	15.5	56.1	23-74
9	M 1	II L	1055	玢岩	72	36	17.6	59.4	24-75
10	I 2	II L	1873	玢岩	45	24	25.4	39.4	24-76
11	H 1	II L	1052	砂岩	52	30	19.1	41.9	24-77
12	H 1	II L	1578	砂岩	49	38	19.9	51.3	24-78
13	G 0	II U	1240	砂岩	52	35	16.2	42.5	24-79
14	I 2	II L	912	砂岩	46	(25)	12.1	19.3	24-80
15	K 2	II L	1477	頁岩	(43)	(24)	22.0	22.1	24-81
16	E 2	II L	1556	玢岩	31	26	17.2	19.7	24-82
17	I 0	II L	1102	砂岩	27	14	9.2	4.2	24-83
18	G 1	II U	1204	砂岩	59	35	17.3	50.9	
19	H 1	II L	1625	砂岩	(19)	(15)	14.9	5.7	

打製石斧 (第25図84～88 図版13)

86例ある。利用されている石材は砂岩、安山岩、片岩、流紋岩、玢岩、ホルンフェルスがある。平面形は所謂「鉛冊形」がほとんどを占め、「楔形」は1点見られるのみである(85)。刃部は直刃が主で磨耗痕が見られるものが多い。調整加工については両面加工からなるものが多い。87はSK 1の出土で正面に大きく表皮を残すため断面がD字形となる。84、88は両方とも荒い調整が加えられており、刃部がかなり磨耗している。

表-16 打製石斧計測表 (1)

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ (cm)			重量 (g)	挿図
					長	幅	厚		
1	C 3	II U	24	流紋岩	13.2	5.4	2.9	225.4	
2	D 2	II U	42	安山岩	(8.9)	5.1	1.9	97.7	
3	D 2	II U	50	砂岩	(9.1)	5.7	1.9	126.8	
4	D 2	II U	53	安山岩	9.0	4.6	1.6	80.3	
5	D 2	II U	67	安山岩	(8.1)	4.6	1.5	63.5	
6	D 2	II U	83	玢岩	10.5	4.4	1.3	72.5	
7	D 3	II U	84	砂岩	(6.4)	(4.5)	1.7	56.9	

表-17 打製石斧計測表 (2)

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石 材	大きさ(cm)			重量(g)	挿図
					長	幅	厚		
8	C 3	II U	101	砂 岩	12.5	5.2	2.7	193.2	
9	D 3	II U	132	ホルンフェルス	(9.6)	4.6	1.5	81.9	
10	D 3	II U	139	砂 岩	11.2	4.9	2.5	149.2	25-86
11	D 3	II U	166	砂 岩	10.4	4.9	2.2	143.2	
12	E 2	II U	192	砂 岩	11.5	4.4	1.7	106.5	
13	E 2	II U	198	砂 岩	9.4	4.9	1.7	98.2	
14	E 2	II U	224	玢 岩	(7.2)	(4.2)	2.3	72.9	
15	E 3	II U	243	砂 岩	9.3	4.6	1.7	96.1	
16	E 3	II U	258	流 紋 岩	10.6	5.2	2.1	151.6	
17	E 3	II U	270	流 紋 岩	(6.0)	4.8	3.4	88.4	
18	E 3	II U	291	砂 岩	(4.3)	(5.0)	2.5	64.6	
19	E 3	II U	292	砂 岩	11.8	5.4	3.0	209.4	
20	E 4	II U	296	砂 岩	(5.4)	(5.1)	1.6	53.1	
21	F 2	II U	320	安 山 岩	12.0	5.6	2.7	236.1	
22	F 2	II U	329	砂 岩	10.3	5.1	2.0	122.1	
23	F 2	II U	342	安 山 岩	(6.4)	5.5	3.2	146.2	
24	F 3	II U	357	砂 岩	(9.6)	5.0	1.9	113.4	
25	F 3	II U	359	玢 岩	11.2	5.1	2.2	157.0	
26	F 3	II U	360	玢 岩	10.9	3.6	1.9	109.4	
27	G 2	II U	445	安 山 岩	(6.6)	5.1	2.3	98.0	
28	G 2	II U	461	玢 岩	10.1	4.0	1.4	64.7	
29	G 2	II U	471	砂 岩	(10.1)	5.5	2.6	149.3	
30	G 2	II U	480	砂 岩	(8.1)	4.6	1.6	62.6	
31	G 3	II U	500	安 山 岩	(10.2)	5.8	3.0	227.3	
32	G 3	II U	503	ホルンフェルス	10.3	4.9	1.3	87.2	
33	H 2	II U	513	砂 岩	9.3	5.1	1.9	117.3	
34	H 2	II U	564	流 紋 岩	(8.2)	4.6	1.7	81.2	
35	H 2	II U	565	安 山 岩	8.7	4.7	2.6	133.1	
36	H 2	II U	567	玢 岩	(7.2)	4.6	2.6	87.3	
37	H 2	II U	570	ホルンフェルス	7.2	4.9	2.1	103.0	25-85
38	H 3	II U	584	玢 岩	10.0	4.3	2.0	101.8	
39	H 3	II U	597	玢 岩	10.8	3.2	2.3	128.8	25-84
40	H 3	II U	607	砂 岩	(6.7)	4.9	1.6	62.5	
41	I 2	II U	613	砂 岩	11.3	4.6	2.1	135.8	
42	I 2	II U	614	砂 岩	(6.9)	(4.2)	1.5	53.5	
43	I 2	II L	618	玢 岩	9.4	4.8	1.5	86.7	
44	I 2	II L	639	玢 岩	(6.2)	(4.4)	2.1	65.2	

表-18 打製石斧計測表 (3)

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ(cm)			重量(g)	挿図
					長	幅	厚		
45	I 2	II U	652	砂岩	(11.4)	5.8	2.8	230.9	
46	E 2	II U	726	砂岩	(12.1)	4.8	1.8	130.0	
47	E 2	II L	734	砂岩	(5.1)	(3.9)	1.1	27.9	
48	E 3	II U	774	砂岩	(6.6)	5.0	2.2	103.7	
49	C 3	II U	793	砂岩	(6.6)	4.8	1.5	67.9	
50	E 3	II L	812	砂岩	(11.3)	6.0	2.6	233.1	
51	E 3	II L	813	砂岩	11.8	4.9	2.2	155.8	
52	E 3	II U	814	砂岩	12.8	6.4	2.5	253.9	
53	F 2	II U	832	安山岩	10.2	5.1	1.7	109.9	
54	F 3	II U	864	安山岩	11.9	4.5	2.5	148.3	25-88
55	H 2	II U	899	砂岩	11.5	4.9	1.2	85.4	
56	F 2	II L	972	安山岩	1.8	5.4	2.5	183.1	
57	H 1	II L	1069	玢岩	10.3	5.3	2.9	185.6	
58	H 1	II L	1078	玢岩	11.7	4.9	3.0	170.6	
59	I 0	II L	1097	砂岩	(7.1)	(5.3)	2.9	123.0	
60	G 1	II U	1213	安山岩	8.7	3.6	1.9	68.6	
61	G 1	II L	1235	砂岩	12.0	4.0	2.1	130.0	
62	I 1	II L	1306	玢岩	(9.2)	5.0	2.9	125.0	
63	I 1	II L	1314	玢岩	8.2	4.3	2.3	97.5	
64	J 1	II L	1331	砂岩	(12.2)	4.7	2.4	160.4	
65	D 2	II L	1344	流紋岩	(9.9)	5.0	2.0	118.3	
66	F 2	II L	1389	安山岩	(8.9)	4.9	2.5	142.5	
67	F 3	II U	1393	流紋岩	(6.6)	(4.9)	1.0	31.2	
68	H 2	II L	1423	玢岩	(5.0)	(4.9)	2.0	67.1	
69	I 2	II L	1473	結晶片岩	(8.7)	3.2	1.3	45.1	25-89
70	J 2	II L	1496	砂岩	10.3	4.8	1.5	100.3	
71	B 2	II L	1747(SKI)	砂岩	10.8	4.8	2.2	133.7	25-87
72	E 3	II L	1778	玢岩	(4.9)	(4.0)	1.7	35.6	
73	E 2	II L	1780	砂岩	10.8	4.8	2.2	133.7	
74	E 3	II L	1787	砂岩	(9.1)	4.8	1.7	107.4	
75	E 3	II L	1850	砂岩	(10.6)	5.9	3.1	236.8	
76	F 1	II U	1858	流紋岩	(12.5)	5.9	2.1	177.7	
77	F 1	II L	1862	砂岩	(7.2)	5.0	2.0	109.8	
78	F 2	II L	1864	砂岩	(9.0)	6.1	2.9	185.5	
79	I 2	II K	1880	砂岩	11.1	5.7	2.3	183.2	
80	I 2	II L	1881	安山岩	10.4	4.8	2.1	110.3	
81	I 2	II U	1883	砂岩	(7.0)	4.6	2.4	92.9	

表-19 打製石斧計測表 (4)

No.	出土区	出土層位	遺物番号	石材	大きさ(cm)			重量(g)	挿図
					長	幅	厚		
82	H 2	II L	1918	砂岩	(5.9)	3.8	0.8	23.0	
83	C 3	II U	1932	玢岩	(6.8)	(4.8)	1.2	40.3	
84	E 4	II L	1939	砂岩	(8.5)	4.4	2.4	112.0	
85	G 1	II L	1949	玢岩	(6.9)	(4.9)	1.0	34.0	
86	E 2	II L	1959	砂岩	(7.2)	(5.4)	2.4	119.3	

磨製石斧 (第25図91 図版13)

2例ある。ただし、1点については刃部の小破片である。91は乳棒状磨製石斧の基部と考えられる。結晶片岩製 (?)。末端に敲打痕が見られる。

磨石 (第26図94)

5例出土。3例は砂岩、2例は安山岩製である。1点のみ図示。94は正面両端に研磨痕をもつが、上端のものが面的に広い研磨痕をもつ。

凹石 (第26図92)

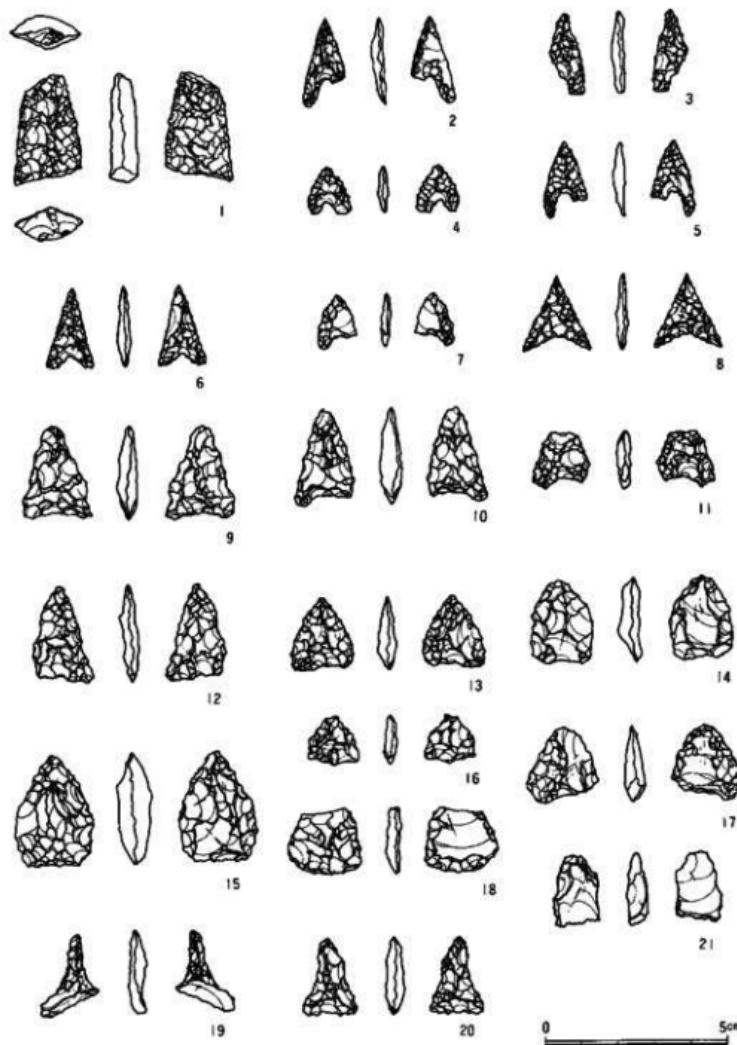
3例出土。3例とも安山岩製すべて正面に凹部を有する。1点のみ図示。92は径5cm、深さ5cmの凹部を有する。

石皿 (第26図93)

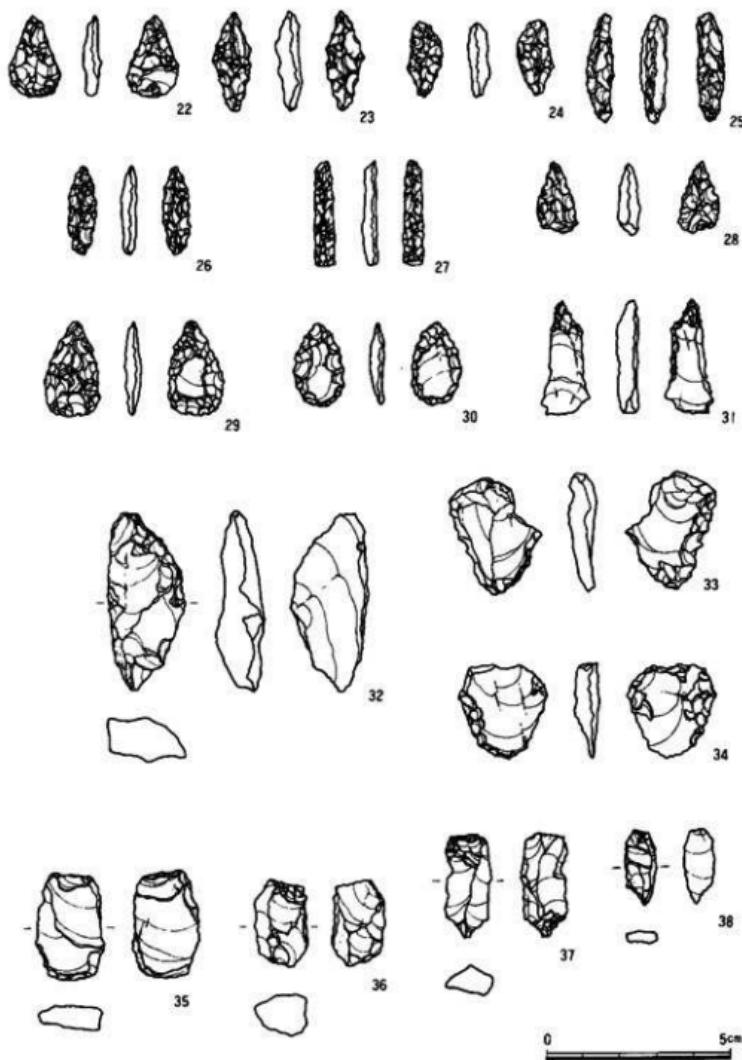
2例出土。すべて破損品である。2例とも残存部分は約程度と考えられ、多孔質の安山岩製である。93は敲打調整を加え、凹部をつくり、有縁を作り出しているが、下端で凹部との明確な区分は無くなる。

石製品 (第25図90 図版13)

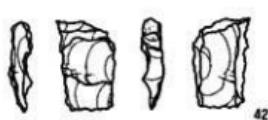
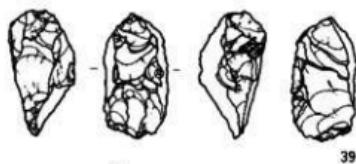
90は石刀の一部である。よく研磨され両側縁に狭小な側面をもつため断面は四角形状となる。現長で最大長14.8cm、最大幅20.0cm、重量55.7gである。結晶片岩製品。



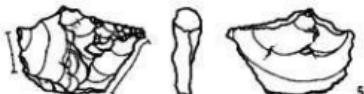
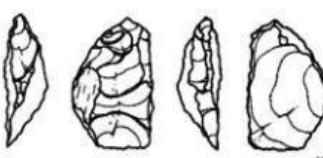
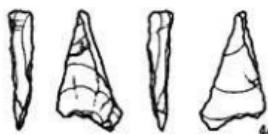
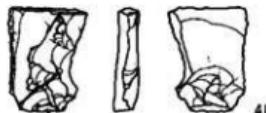
第17圖 石器尖頭器(1) 有舌尖頭器・石鏃・石錐



第18図 石器実測図（2） 石錐・削器・ビエスエスキュー

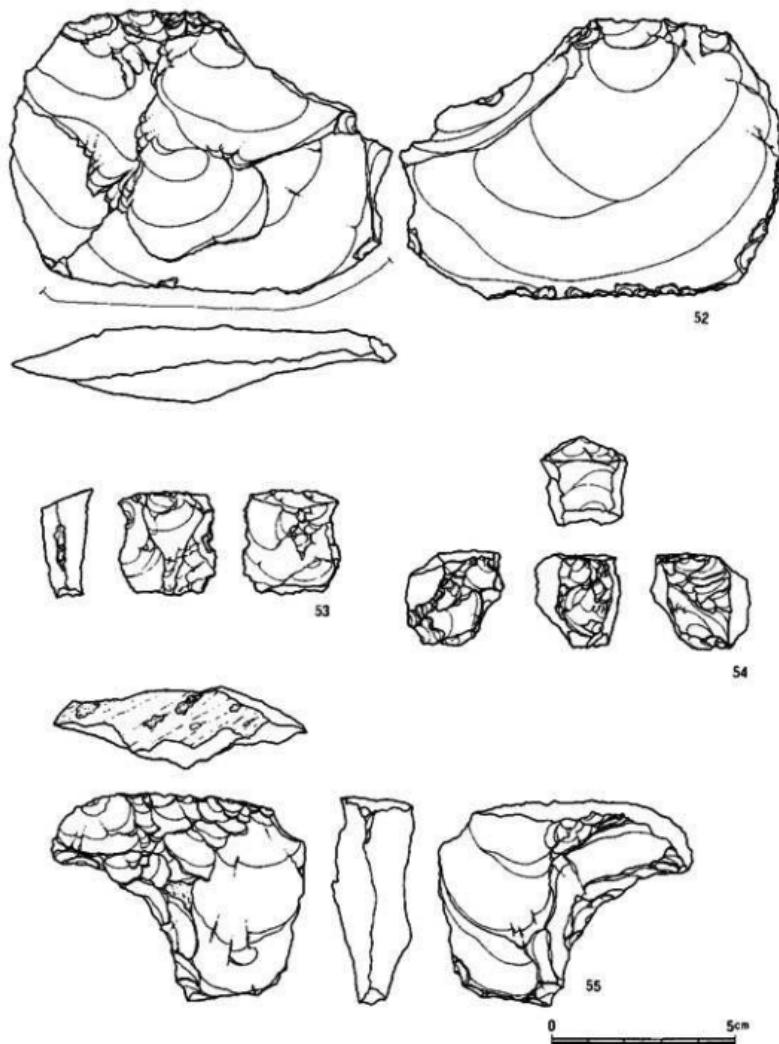


39

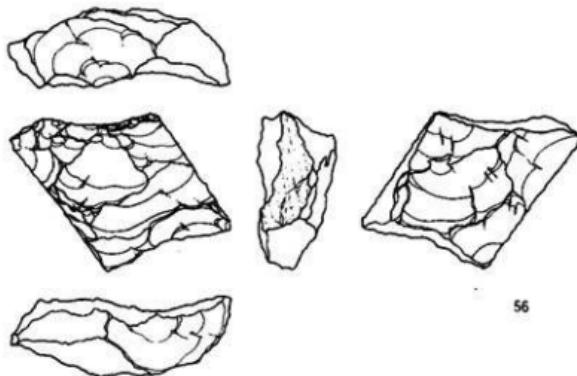


0 5cm

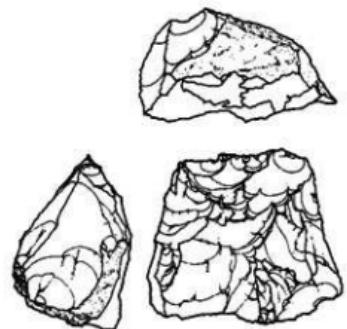
第19図 石器実測図（3） ピニエスキーネ・彫器・ヘラ形石器・RF・UF



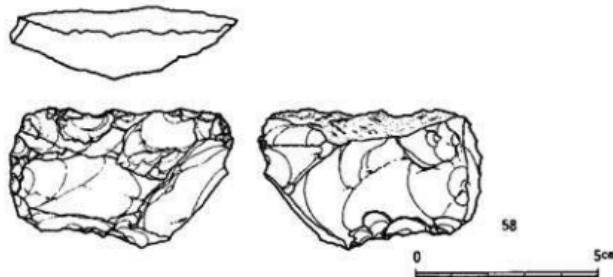
第20図 石器実測図(4) U F・石核



56



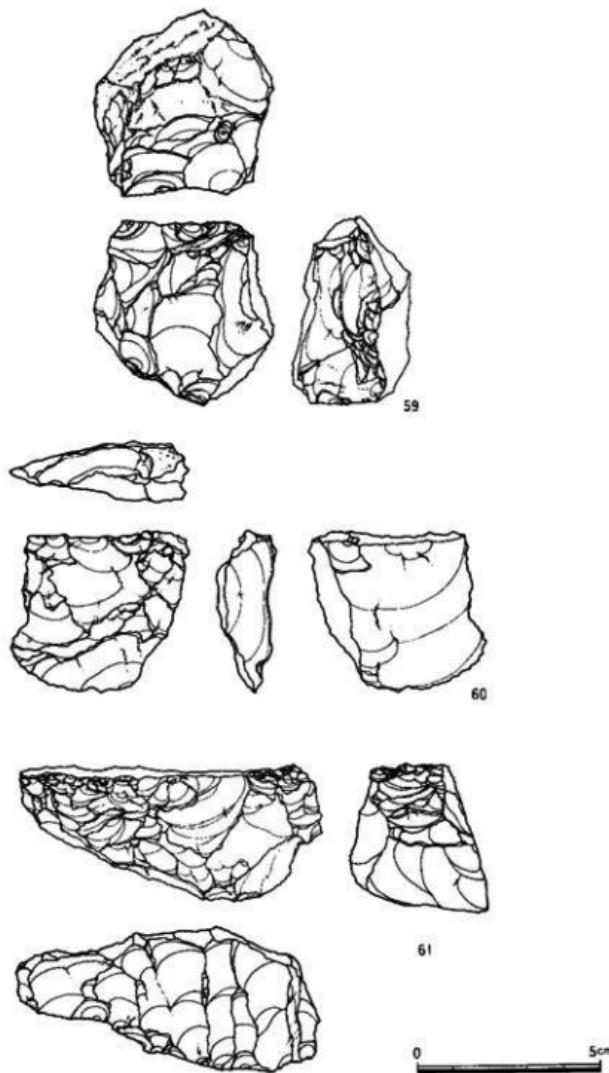
57



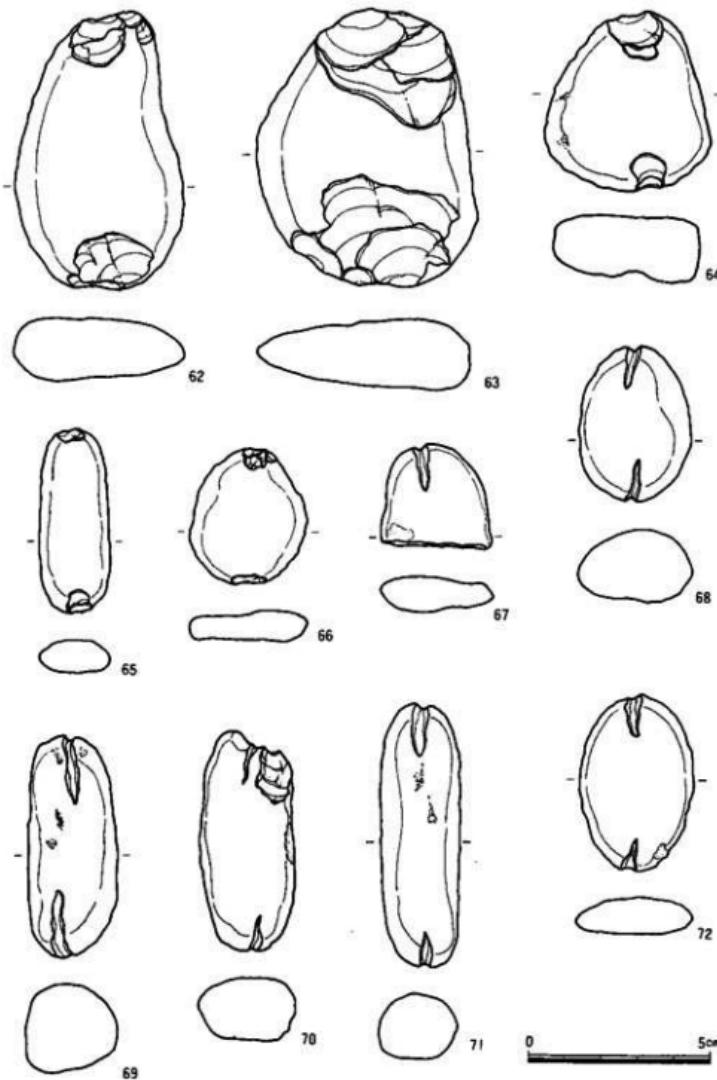
58

0 5cm

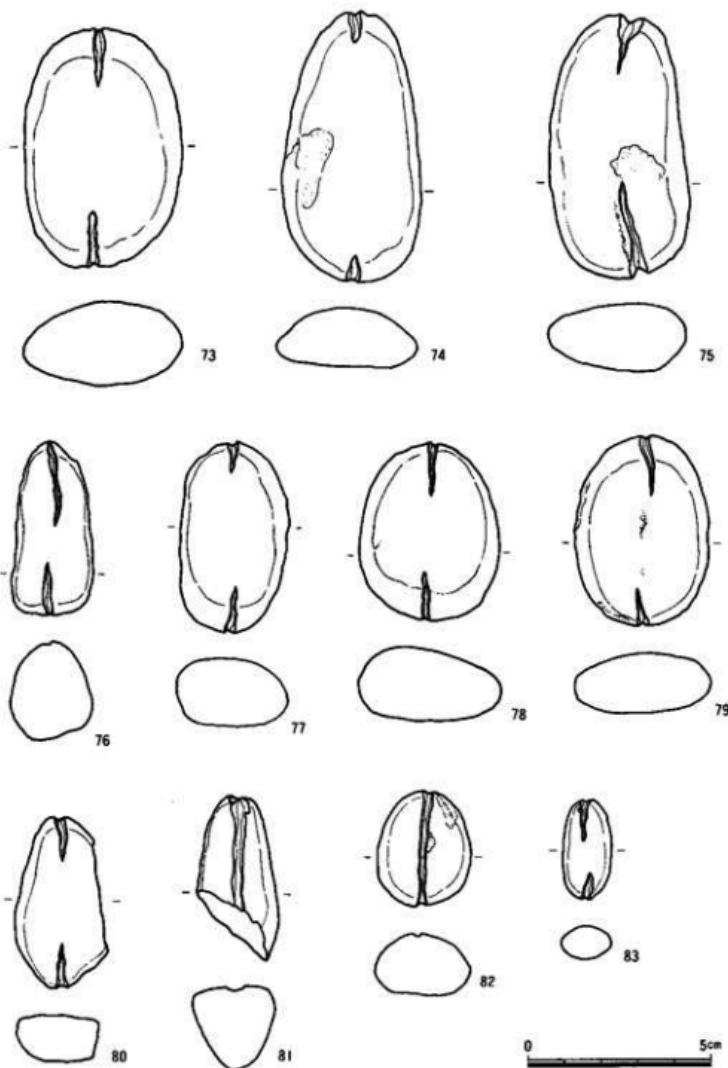
第21図 石器実測図（5） 石核



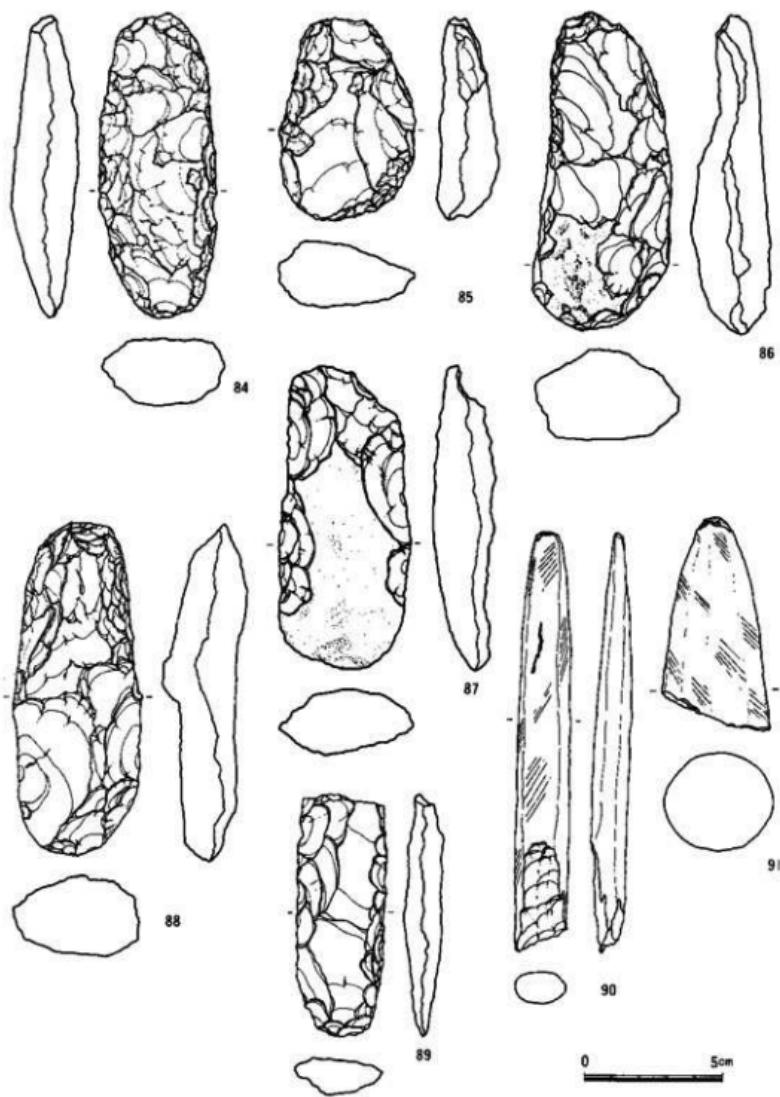
第22図 石器実測図（6） 石核



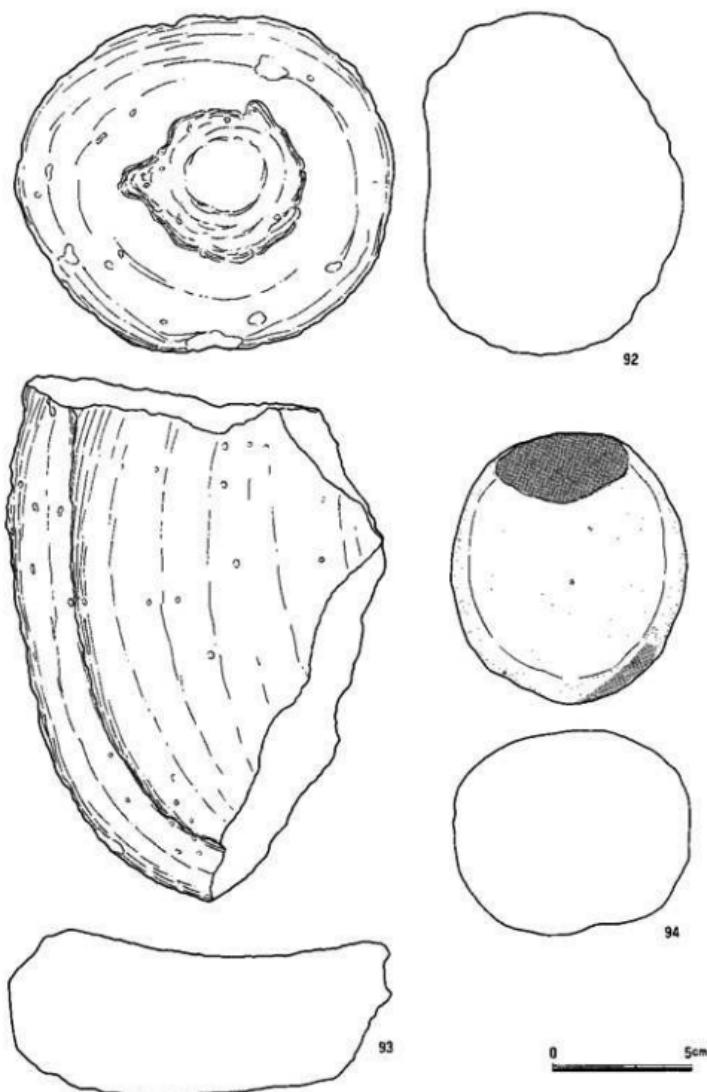
第23図 石器実測図(7) 橢石錐・切り目石錐



第24図 石器実測図（8） 切り目石錐



第25図 石器実測図(9) 打製石斧・磨製石斧・石刀



第26図 石器実測図(10) 両石・石皿・磨石

V 考 察

東海北陸自動車道（美濃～八幡）建設工事に伴う平成3年度の宮下遺跡の緊急発掘調査の成果と課題をまとめ、考察にかえたい。

1、宮下遺跡は長良川に南面する標高204～212mの山麓緩斜面上に立地している。今回調査し終えたのは東海北陸自動車道建設路線にかかる600m²である。しかし、SB1の北半部が調査区対象外へと続くこと、また、調査区北部には約3000m²以上の平坦な緩斜面が存在すること等より本来遺跡の中心はそちらにあり、今回の調査区については、集落先端部を発掘した程度とみなせる。床面等の検出はできなかったものの縄文後期に属すると考えられる堅穴住居址2基が検出されている。プランについては予測の域を脱しえないが、SB2は北側に存在する石列から方形プランが考えられる。遺物包含層については、その堆積状況からかなりの流れ込みが判明しており、これに伴い遺物の大半も上方からの流れ込みが考えられる。

2、今回出土した土器は第IV章3に示したように、縄文時代中期から古墳時代に至る多岐、多様にわたる内容を含んでいる。しかし、ほとんどが全体を復元できるような資料ではなく、分類不能な小破片が多数を占めた。また、大部分の資料が包含層から出土したもので、その新旧関係を層位的に追うことができなかった。が、今回出土した土器の中で中心を占めた縄文時代後期・晩期にかけての時期については、県内において発掘件数が多いにしても資料が断片的であったり、付随する遺構が不確実であったりする場合が多く、今回提示し得たものは上記2点の問題を含んでいるにもかかわらず県内において当該期の様相を理解する一助になると考えられる。

3、長良川流域においては岐阜市・関市・美濃市・大和町・白鳥町と今まで有舌尖頭器が表採あるいは発掘され、美並村のみ空白地であったが、今回宮下遺跡でも第III層直上から折損資料ではあるが有舌尖頭器が出土し、当該地でも縄文時代草創期・早期に遡る遺跡の所在が明らかとなった。又、多量の剥片・石核が出土しており縄文時代後・晩期における剥片剥離技術を明らかにすることができた。SB2周辺からは切り目石錐が集中して出土しており、眼下に流れれる長良川に対する経済活動を想起させている。しかし、反面、磨石・凹石・石皿など植物質食料の石器が少なく、器種の数量比にはばらつきがはげしい。石材に関してはチャートが大部分を占め、他に安山岩・黒曜石・片岩・玢岩・ホルンフェルス・頁岩等があり、多方面にわたる行動圏を暗示するデータを提示してくれた。ただ、石器も土器と同様、その分布に何らかの傾向は見られず、各々がどの時期の土器に判出するか知ることはできなかった。

最後に本調査に関係された方々、本書の作成にあたりご教示、ご協力いただいた方々に深く感謝し、筆を置きたい。

参考・引用文献

- 渥美教育委員会（1988）：『渥美町埋蔵文化財調査報告書4 伊津川遺跡』
- 大參義一（1978）：「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について」
『名古屋大学文学部研究論集』
- 加藤晋平、小林達雄、藤本強（1981）：『縄文文化の研究4』
- 可児町北裏遺跡発掘調査団（1973）：『北裏遺跡』
- 上矢作町教育委員会（1983）：『道下』
- 河合村教育委員会（1971）：『トド小島ダム関係埋蔵文化財調査報告書』
- 岐阜県教育委員会（1974）：『関市千疋竹之腰遺跡の調査』
- 岐阜県教育委員会（1988）：『はいづめ遺跡』
- 岐阜県教育委員会（1991）：『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
- 下呂町教育委員会（1985）：『下島遺跡』
- 紅村弘（1971）：『東海先史文化の諸段階』
- 紅村弘（1978）：『東海先史文化の諸段階（資料編II）』
- 国府町教育委員会（1988）：『宮下遺跡』
- 坂下町教育委員会（1976）：『門垣戸遺跡』
- 坂下町教育委員会（1977）：『坂下町濃ヶ池遺跡調査報告書』
- 坂祝町教育委員会（1988）：『芦戸遺跡』
- 白川町教育委員会（1983）：『薬師遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木道之助（1981）：『國錄 石器の基礎知識III』
- 閔市教育委員会（1976）：『閔市松ヶ洞遺跡発掘調査報告書』
- 閔市教育委員会（1989）：『塚原遺跡・塚原古墳群』
- 高山市教育委員会（1991）：『垣内遺跡発掘調査報告書』
- 多良町教育委員会・同志社大学考古研究室（1990）：『伊木刀遺跡』
- 度会町遺跡調査会（1988）：『森添遺跡発掘調査概報II』
- 中津川市教育委員会（1979）：『中村遺跡』
- 中津川市教育委員会（1985）：『阿曾田遺跡』
- 中津川市教育委員会（1988）：『落合五郎遺跡発掘調査報告書』
- 長野県考古学会（1967）：『佐野』
- 洞戸村教育委員会（1987）：『市場遺跡発掘調査報告書I』
- 洞戸村教育委員会（1988）：『市場遺跡発掘調査報告書II』
- 美濃加茂市教育委員会（1973）：『牧野小山遺跡』

- 美濃市教育委員会（1973）：『上巾上II遺跡』
 美濃市教育委員会（1986）：『樅ノ木遺跡発掘調査報告書』
 美並村教育委員会（1971）：『美並村史』通史編上巻
 美並村教育委員会（1976）：『美並村の遺跡』
 美並村教育委員会（1988）：『稻葉遺跡』
 山形県教育委員会（1989）：『月の木B遺跡発掘調査報告書』
 脇田浩一（1984）：『八幡地域の地質』
 渡辺誠（1973）：『縄文時代の漁業』

註

- 1) 脇田浩一『八幡地域の地質』(1984)
- 2) 石器分類に関しては佐野「第5節石器」『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』岐阜県教育委員会(1991 P P129~134)を参照した。
- 3) ① 長・幅・厚は最大長・最大幅・最大厚で、折損品については()を付した。(以下同)
 - ② 最大幅については本来上半部にあるものをA、下半部にあるものをBとした。
 - ③ 側縁については先端部を上に向ける調整の入念な側を表として据えた時、側縁の形が直線状のものをa、凸弧を描くものをbとした。
 - ④ 残存部位については先端部が残るものとA、中央部の残るものとB、基部の残るものとCとした。
- 4) ① 扱深(基長)については、扱深はえぐりの深さを、基長は最大幅からの位置より下位の長さを示す。前者には-、後者には+を付した。単位はmmである。
 - ② 最大幅については、尖頭部にあるものとA、基部にあるものをBとした。
- 5) 尖頭部の長さはいわゆる錐部分の長さ、幅は尖頭部の中間位置の幅、厚さは幅の計測位置である。断面形については同じ箇所で観察した。なお、折損品については折れ口で観察した。
- 6) 加工部位と種類については素材の背面を上に基部側を上部に置いた時、左側をa、右側をb、末端をe、裏面の左側をc、同右側をd、同末端をfとし、加工が1線刃全長にわたるものとA、同刃以上をB、同刃以下をCとした。又、加工の種類については1は通常の剝離、2はフルーティング様剝離、3は微細な剝離とした。
- 7) 長さ1、長さ2、打欠き幅の計測については渡辺誠「礫石錐計測部位説明図」『阿曾田遺跡発掘調査報告書』(1985) P 439を参照した。



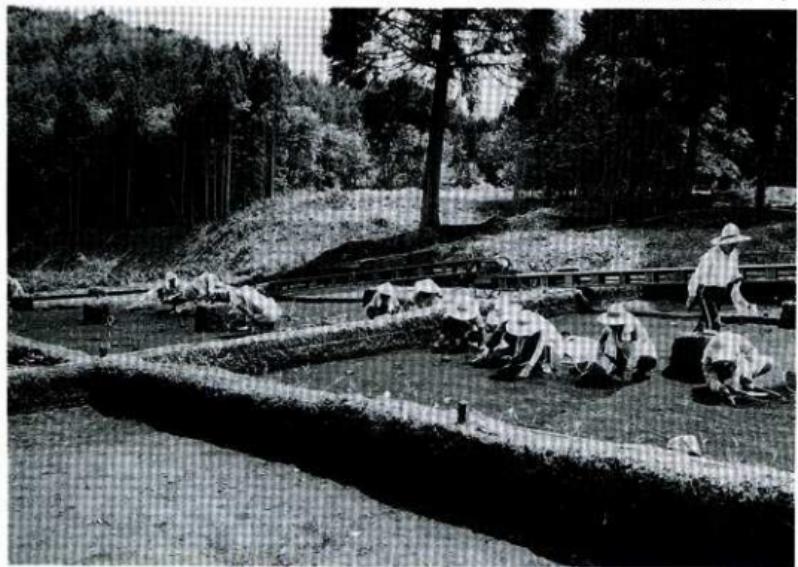
遺跡遠景（南東から）



遺跡近景（北西から）

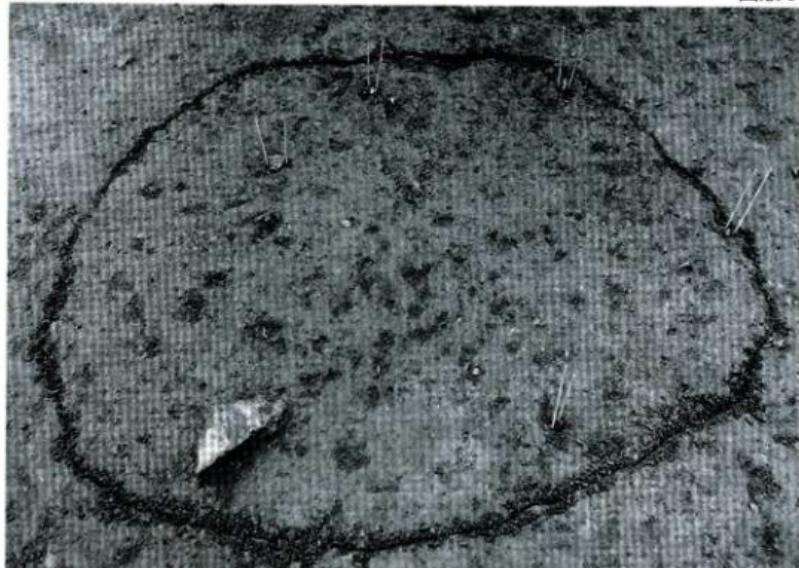


発掘後全景（南西から）



調査風景

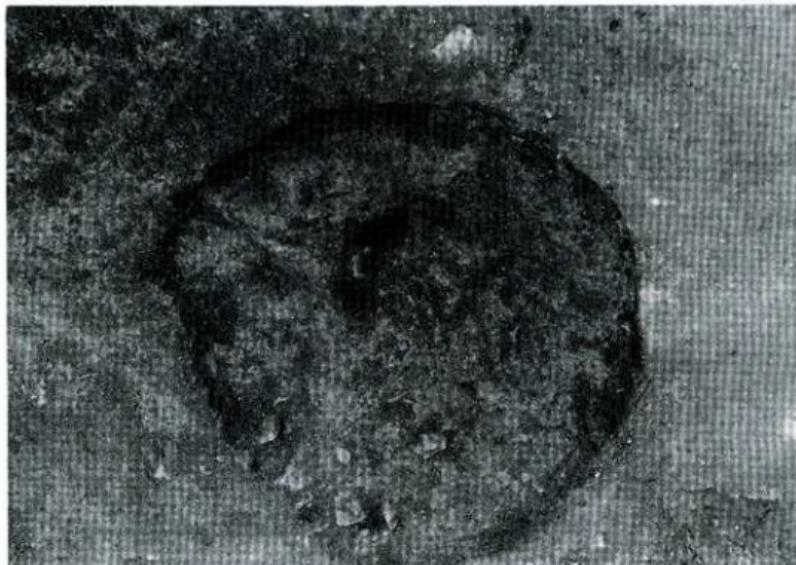
図版 3



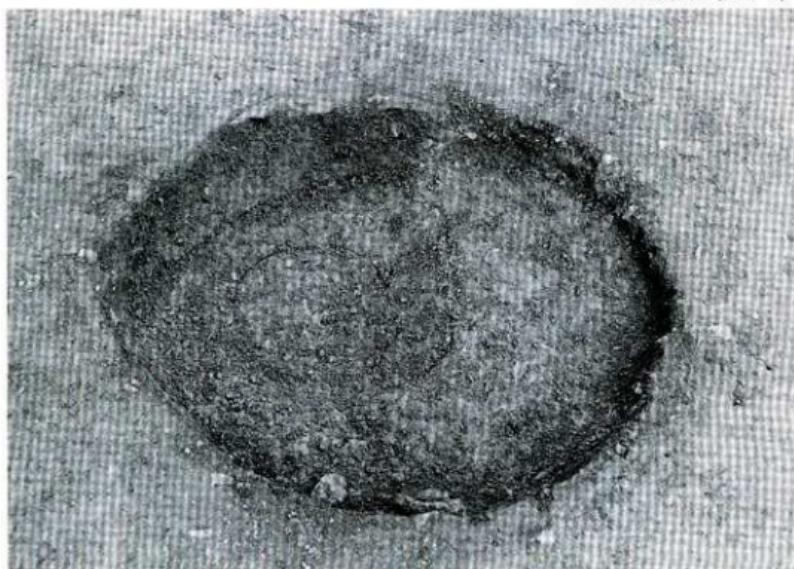
SK I 検出状況 (北から)



SK I 実掘状況 (南から)



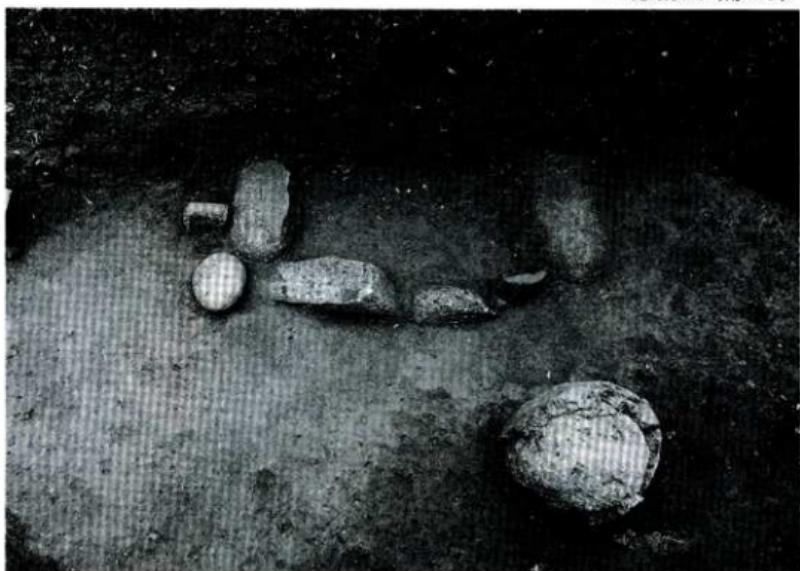
S K 2 完掘状況（西から）



S K 3 完掘状況（北東から）

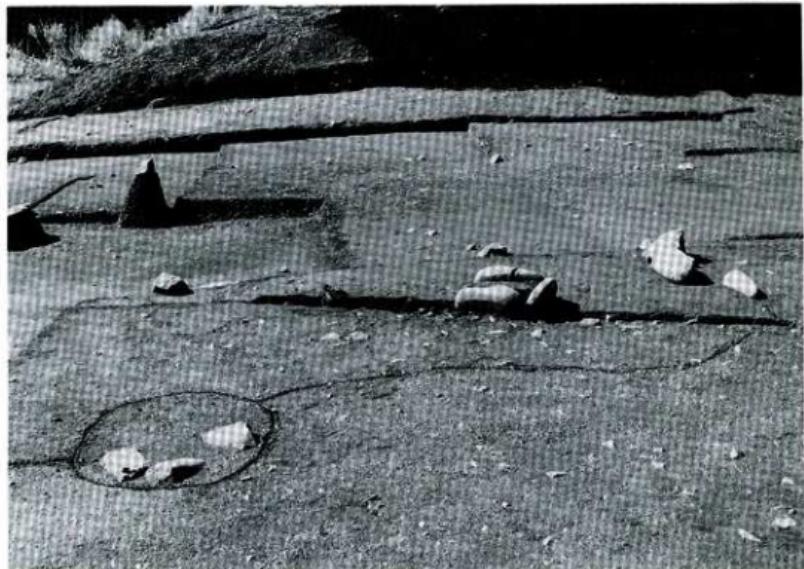


P I 完掘状況（南から）



S B I 炉（南から）

図版 6



S B 2 (東から)



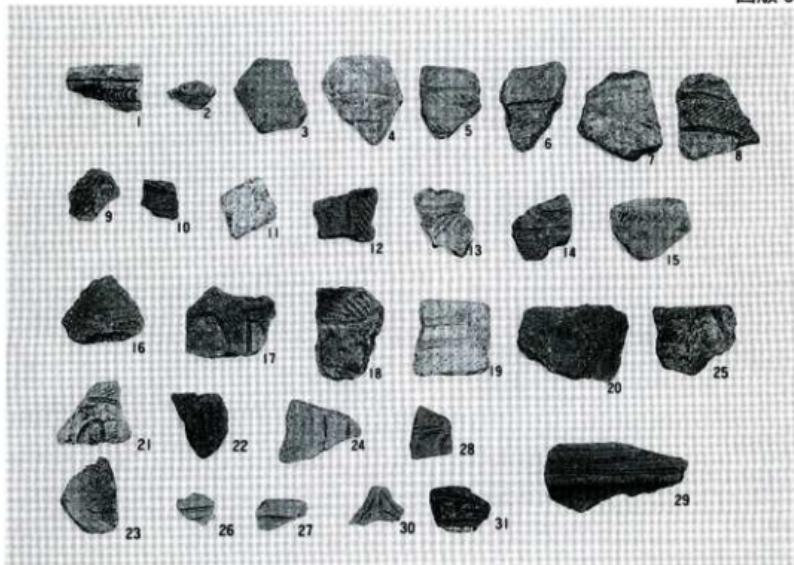
S B 2 炉 (北から)



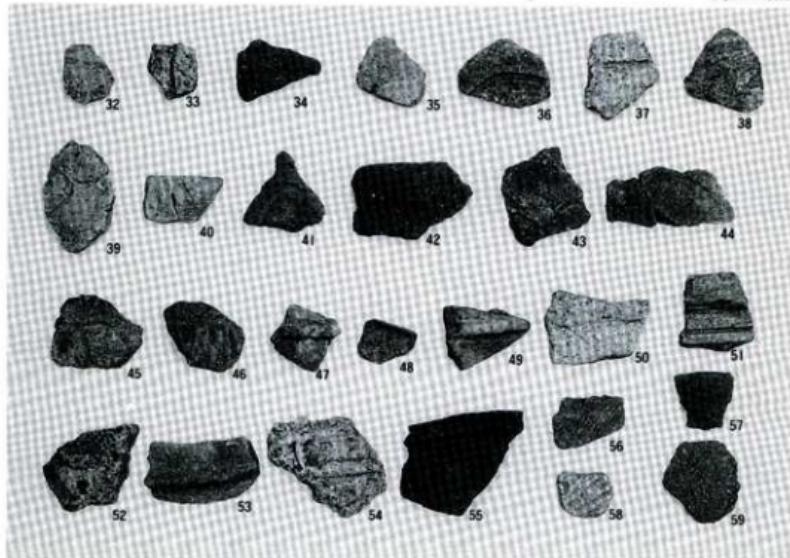
有舌尖頭器(No. 1)出土状況（西から）



石刀(No. 90)出土状況（南から）

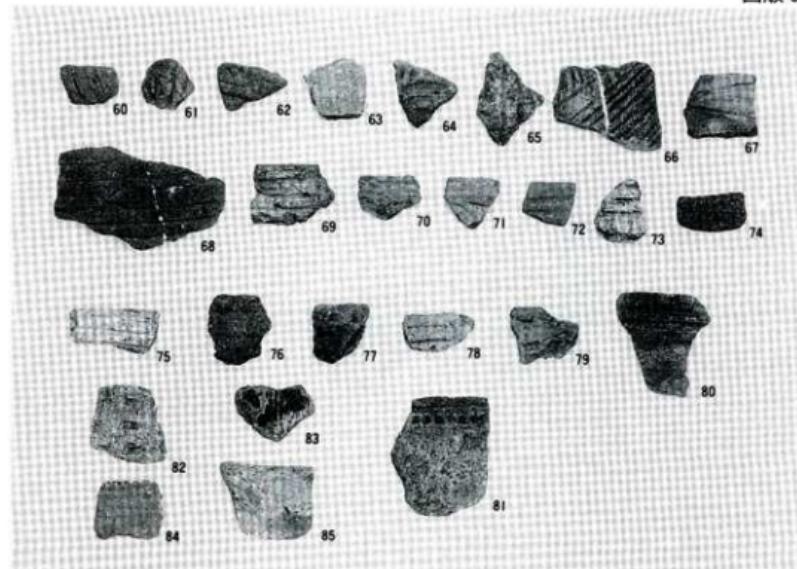


縄文土器(1)

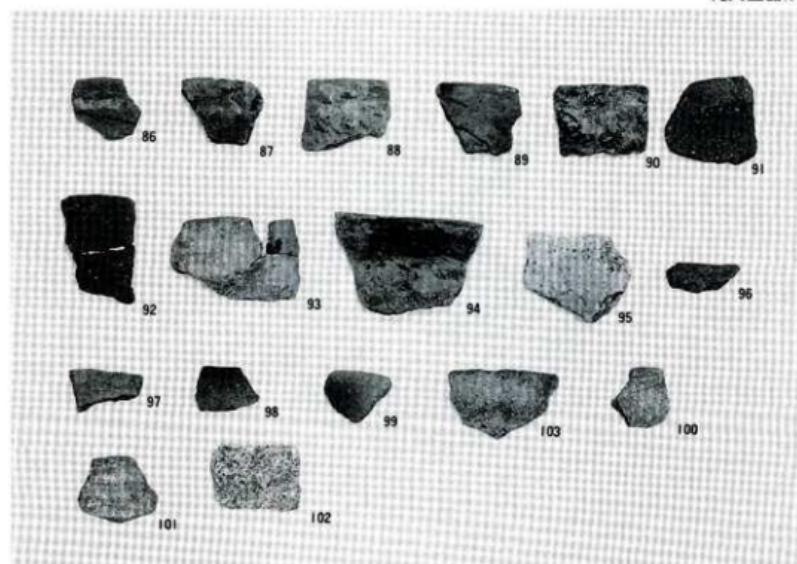


縄文土器(2)

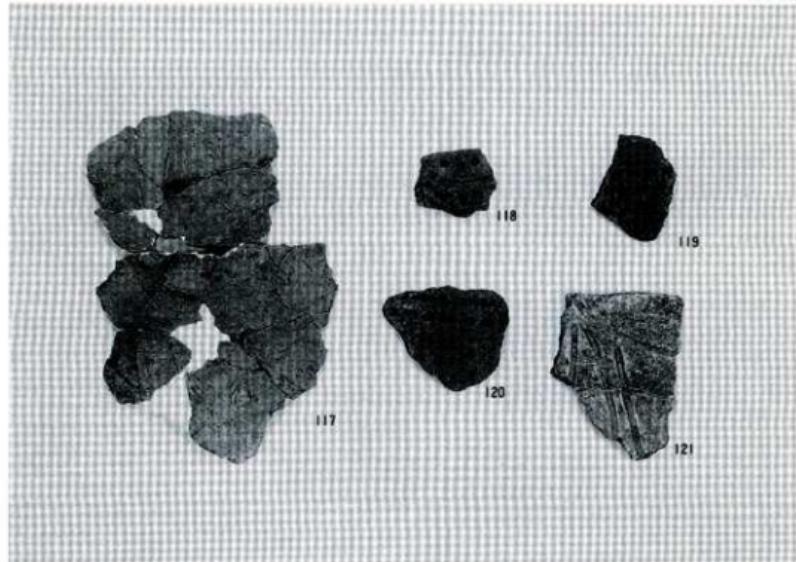
図版 9



縄文土器(3)



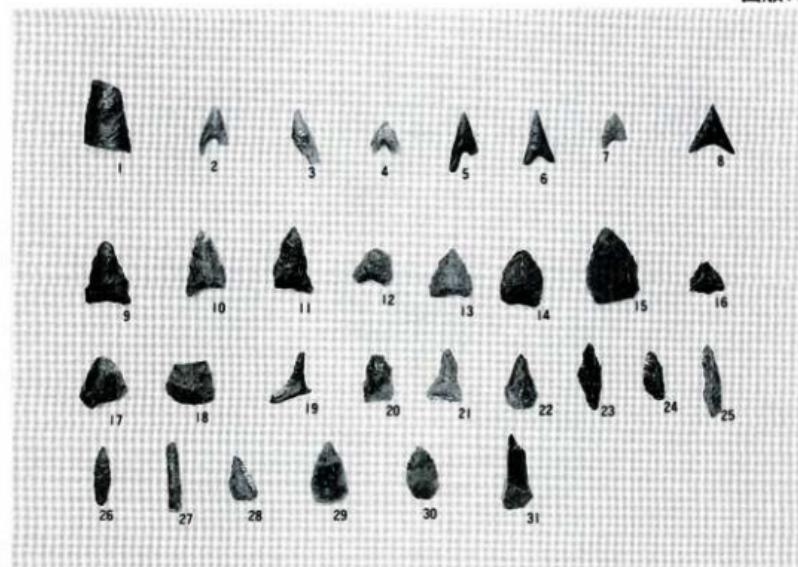
縄文土器(4)



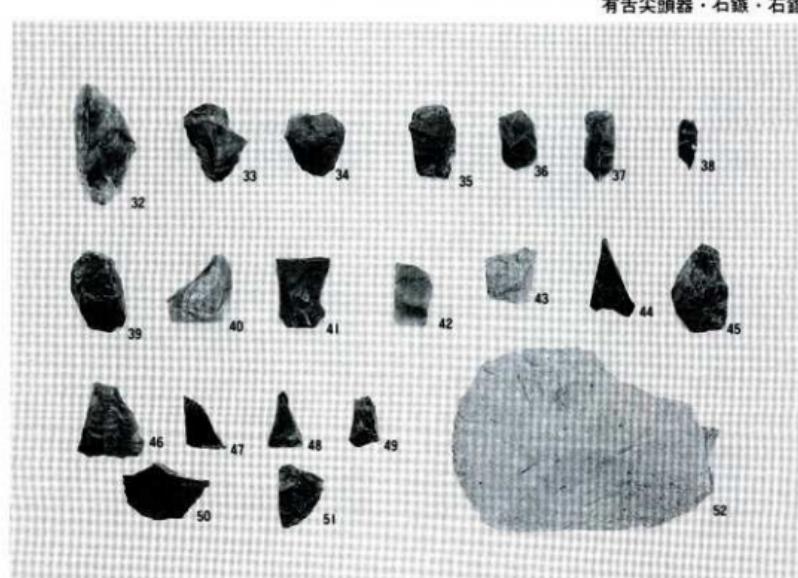
縄文土器(6)



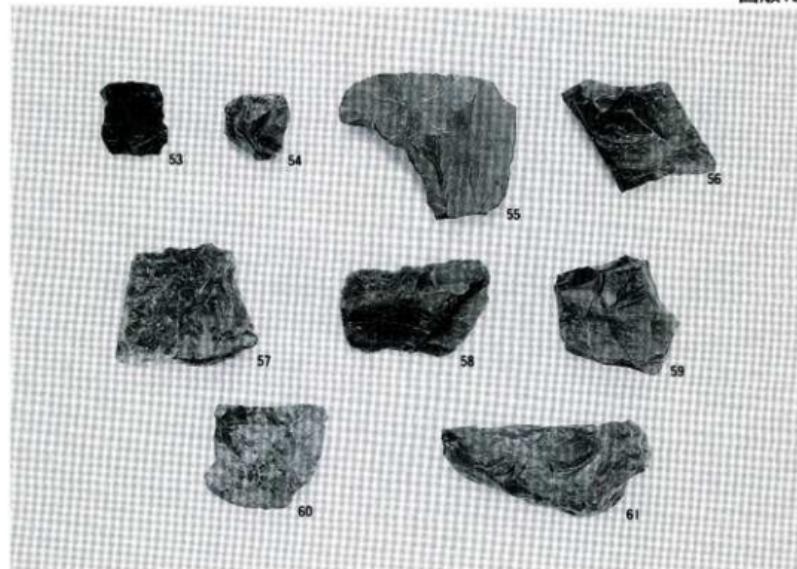
縄文土器(No.108)



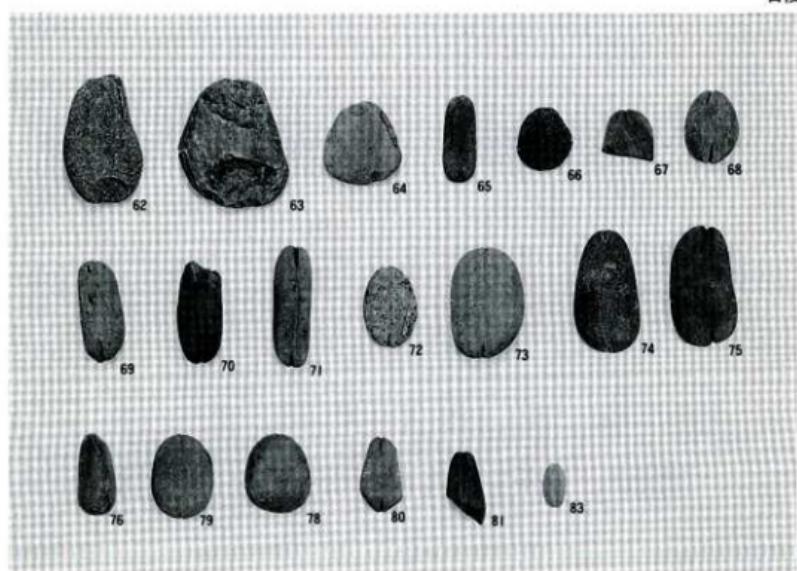
有舌尖頭器・石鎌・石錐



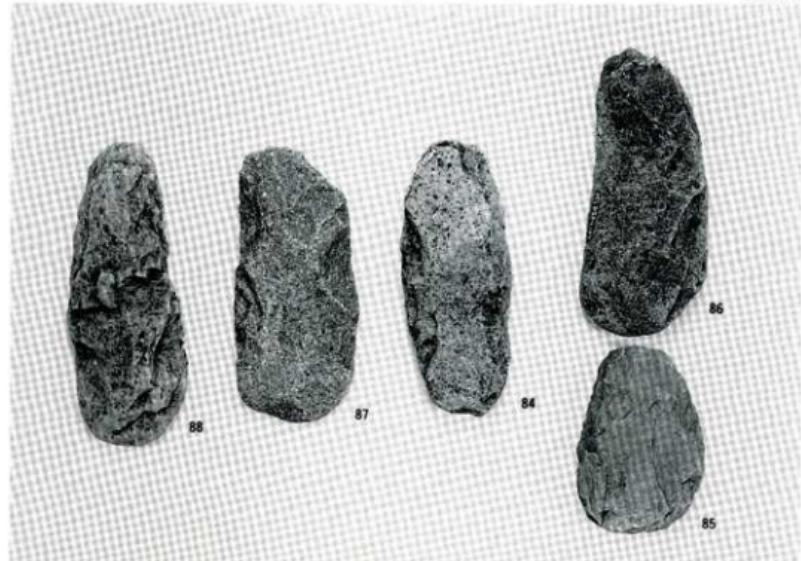
削器・ビエスエスキュー・彫器・ヘラ形石器・R.F.・U.F.



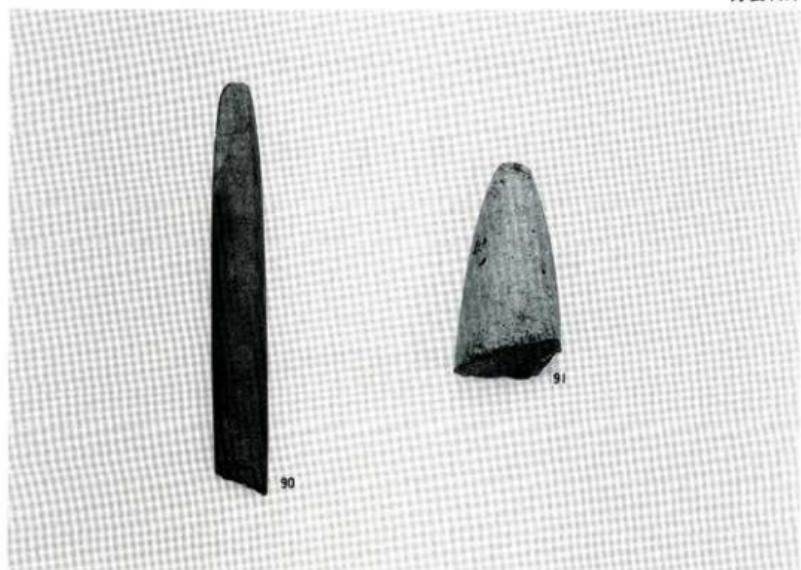
石核



石錘



打製石斧



石刀・磨製石斧

岐阜県文化保護センター調査報告書 第4集

宮 下 遺 跡

1992年3月25日 印刷
1992年3月31日 刊行

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター

岐阜県本巣郡慈積町牛牧宮下 195

印 刷 株式会社 太洋社